

浄土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十四年一月廿日印刷納本
昭和十四年二月一日發行

第五卷 第二號

二月號



◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります。

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

健康の安全地帯

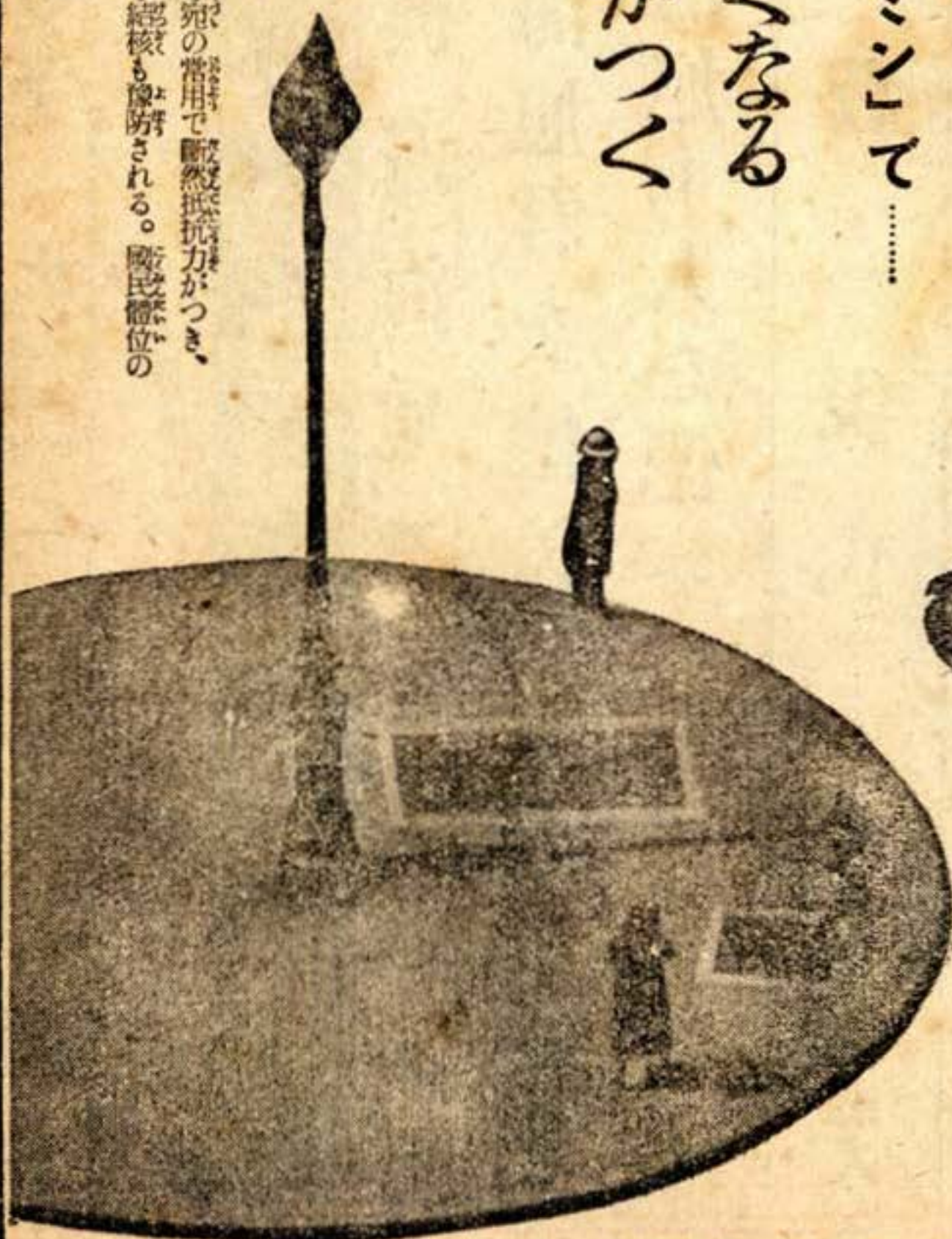
朝夕一球宛の

「理研ビタミン」にて……

風邪をひかなくなる
結核を防ぐ力がつく

見よ！この力價！

理研ビタミンは純粋のビタミンAとDを最もよいグロビニール球に包んだ強力製品です。一球中に七〇〇國際單位、すなはち錠剤二十五箇分のビタミンAを含有し朝夕一球宛の常用で斷然抵抗力がつき、呼吸器が強化され、風邪をひかなくなり結核も豫防される。國民體位の向上に理想的營養劑として推賞される。



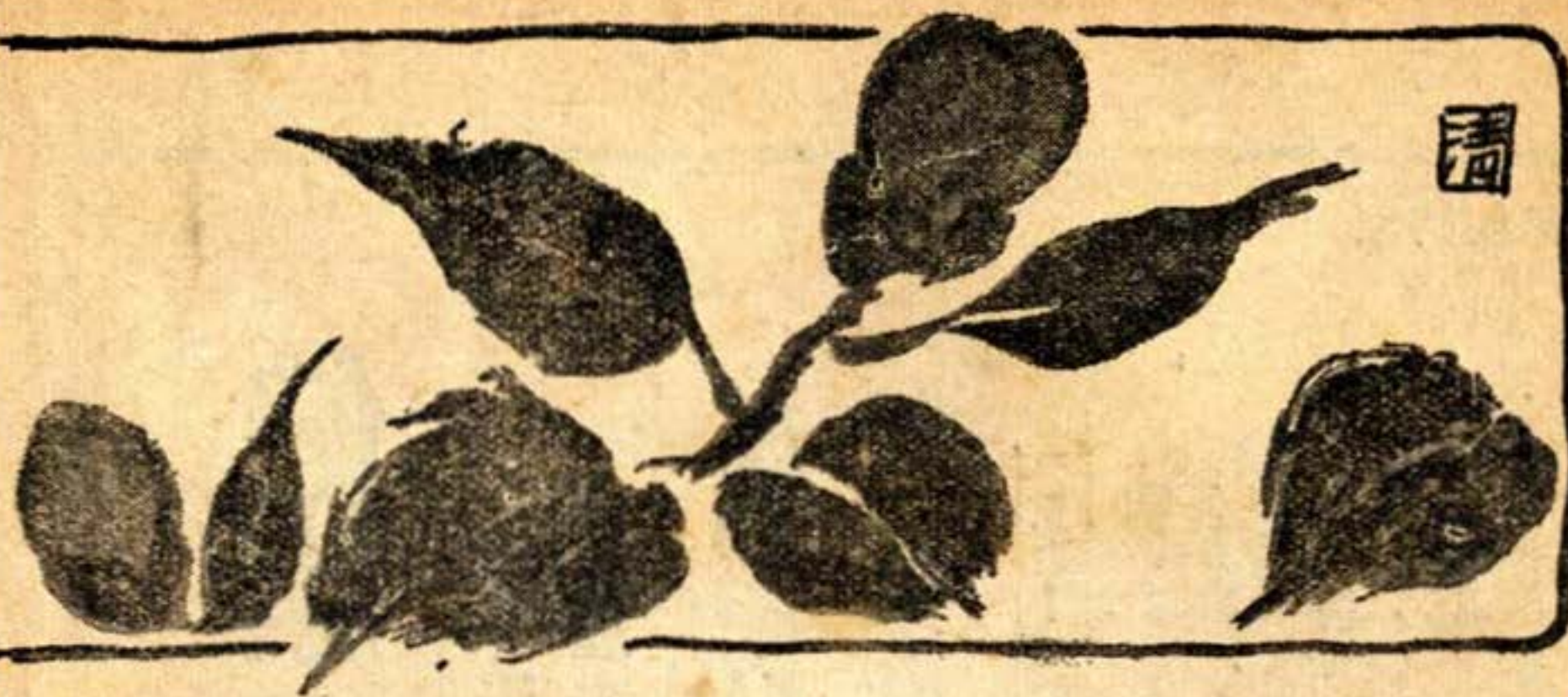
理研ビタミン

(包裝)

四十球入 百球入
五百球入 千球入

婦人子供用小粒製品

五拾球入 一、三〇
百球入 二、五〇



◇浄土 第五卷 第二號 二月號 目次◇

表紙

鈴木金平

特輯 近代的佛者の典型 渡邊海旭師を偲ぶ

學信行三拍子揃った

渡邊海旭君

高嶋米峰 (四)

渡邊海旭君を懷ふ

大村桂巖 (三)

聖僧海旭上人を偲ふ

赤尾光雄 (六)

浄土教と現代

渡邊海旭上人 (五)

渡邊海旭先生追憶の夕

本誌記者 (九)

隨想 輝きの生活

中野尅子 (八)

天壽定命の體驗

望月圭介 (四)

信仰相談

中村辨康 (四)



戰死した一人子の消息……………郁芳隨潤……………(五)

これぎりの心持……………石井眞峯……………(四)

淨き『友の會』だより……………(五〇)

山椿咲く。……………吉田絃二郎……………(三)

小 光をあびる人々……………細田源吉……………(四)

童 話 銀の鈴と小猫……………中山義助……………(四〇)

歌 壇……………與謝野晶子……………(一九)

俳 壇……………太田耳動子……………(三)

日常動行
法解説 まかせ切る信仰……………中村辨康……………(五)

鑽仰運動ニュース……………(五)

編輯 後記……………(五)



近代的佛
者の典型
渡辺海旭
師を偲ぶ

學信行三拍子揃った

渡邊海旭君

高嶋 米峰

世に、學する人は少くない、信ずる人も少くない、そうして、行ずる人も有るには有る。しかし、この學信行の、三拍子揃った人が、果して幾人あるだらうか。殊に、それが、最も多く有らねばならぬ佛教界を眺めて、一層の心細さを感じしめられるのである。この間に於て、亡友渡邊海旭君の存在は、正に闇夜の巨燈の如きものであつた。嗚呼、それさへ、今は消えて、既に七星霜を經てしまつた。國家の前途容易ならざるものある今日、佛教界に課せられたる問題の頗る多き今日、君を懷ふの情、特に切ならざるを得ないものがある。

君は、實に學の人であつた。君は、外遊前、佛教原典研究の必要を力説して、荻原雲來君と共に、その道の先驅者であつたが、荻原君の後を追う

て獨逸に留學し、ロイマン教授の下に梵語巴利語を通じての佛教研究は、その業績頗る顯著なものゝあつたことは、世界の東洋學者の間に、喧傳せらるゝところであつた。

君は、在獨中、屢々その研究の結果を送つて來たが、僕に宛てたものだけでも少くはない。僕はその度毎にそれを新佛教及び東洋哲學に掲載したのであるが、それが縦令、君の研究の片鱗とも見るべき短篇でも、どこかに、君の獨創の見解が盛られて居なかつたことは、一度も無い。つまり、何かしら、獨自の見解でも無ければ、筆を執らないといふ、學者の良心の產物であるといふことを、肯かせられたものである。

歸朝後の君は、身邊頗る多忙であつて、蘊蓄を發表するといふ時間も、得難かつたであらうと、同情もして居たのであるが、それでも、時々發表する論文は、必ず、學界に、何等かの指導と啓發とを與へずには居なかつたといふところに、依然として、君の學の人であるといふ面目の、躍如たるを看取することが出来るのであつた。その間に於て、君の遺した唯一の著述と言はれる『歐米の佛教』一卷、これは、今でも學者の好參考に値するものであるが、大正二年頃の日本の學界が、この萬人未着手の好著を興へられたことに依つて、

海旭師を偲ぶ

どれだけ、その見聞を
掘め、どれだけその研
究態度に、示唆を興へ

近代的佛 者の典型 渡邊海旭師

明治、大正、昭和を通じて、佛教界を代表する眞の大徳、渡邊海旭先生が昭和八年西化せられてから、既に七年本年一月廿六日は恰も七回忌に相當する。回顧すればする程、先生が我が國の學界、思想界、精神界に残された足跡は大きく廣い。我が國が新東亞建設の新段階に立つてゐる今日、もし先生がおいでになつたら」とは、先生を知る者の等しく追慕するところである。

先生は明治五年東京に生れ、十四歳にして端山海定師の室に入り、廿九歳選ばれて海外留學生として獨逸に渡り、滯獨十年。其の間幾多の輝かしい學動を残された。歸朝後は諸大學の教授としては學の蘊蓄を傾け、社會事業家としては佛教社會事業の先達となり、芝中學校長としては幾多子弟の訓育に當られるなど多方面の業績は枚舉に遑がない。先生の高邁なる理想と燃ゆるが如き護法心と子弟を思ふ切々たる慈愛とは、その儘現代佛教徒に受繼がねばならない。

本誌は茲に先生と因縁淺からざる諸氏を煩はし、其の學風の一端をお傳へすることを得た。

られたかは、今日に至つて、尙彼の書が、學者の座右に、缺くべからざる名著とせられて居るのに依つても、知ることが出来る。僕等のやうに、愚著駄著を、縦令等身ほどに積み重ねて見たところで、出版後、一二年の生命も費束ないのであらうが、渡邊君の如く、纏まつた著書としては唯僅に一冊しか遺さないとしても、その生命が、永久であるとするならば、學の人としての君の本懐は、これに過ぎたるはないと言つてよからう。尤も、この『歐米の佛教』完成に到るまでの、僕の苦心焦慮が、如何に深刻のものであつたかは、筆舌に盡し難いものがあつた。元來あれは、『佛教講義録』といふ、定期刊行物に連載したものであるが、一度だつて、締切期限に間に合つたことの無いのが渡邊君だ。はがき、手紙、電報、居催促から面責といふ、隠かならぬ戦術まで用ゐて、それでも遂に間に合はず、他の諸君に無理を言つて、埋め合せをして貰つたことも、二度や三度でない。そこで、同人間では『あれは、渡邊が書いたのではなく、高島が書かせたのだ。』といふことにさへ、なつてしまつたのである。講義録が完成してから數年後に、單行本にして世に出した時、渡邊君は、非常に喜んで、『イヤ有り難う、おかげで一冊出來た。』と言つて、僕に禮を言つて呉れたのであるが、何だか、主客顛倒したやうで、恐縮でもあつたが、又實に僕も嬉しかつた。

學の人として君の仕事は、まだ澤山豫定されて居た。僕の手で豫告したものに、『普賢行願讃』がある。それはその出版費を、故石川

照勸君が負擔するといふ、約束まで出來て居たのだが、そのまゝになつてしまつた。『孔雀五經の研究』なども、原稿はすつかり出來て居たと思ふが、それは、震災の時に、焼失してしまつた。その他、若し、君の壽をして、更に十年あらしめたならば、佛教々學界は、どんなに惠まれたか知れないと思ふが、それは、今更どうにもならない愚痴である。

君は又、信の人であつた。その信仰は、行から遊離した形式的なものでもなければ、口先だけの空念佛でもない。心の内に燃えて居る信火である。内に信火が燃えて居るからこそ、自然に行の煙が立ち上るのである。だから、渡邊君が、信の人であるといふことは、同時に行の人であるといふことであつて、その一言一行、一舉一動、悉く信仰の具現で無いものはない。

印度の志士、ラスビハリ・ボース君の語るところに依るに、曾て、東京外國語學校で、印度語の教授をして居た印度人、アタール君が、非常に熱心な愛國者であつたために、英國大使館から、有らゆる迫害を受けてそのために遂に自殺してしまつた。その時渡邊君は、葬式萬端から、費用一切を引受けてやつたばかりでなく、その遺骨を門下生青柳君に託して、わざ／＼印度のアタール君の親戚のところまで、持たせてやつたものである。その時、或る坊さんは、アタール君は、此くの如き事情の下に自殺したのであるから、青柳君がその遺骨を携へて印度に行けば、必ず英國官憲のために捕へられるか

ら、それは止めた方がよからうと言つたのである。その時、渡邊君は、吾々は佛の使である。吾々の恐れるところは、釋尊の外には無い。正義人道のために、命をかけることが出来なければ、眞の坊さんとは言へない。正當なことをするのに、如何なる迫害があらうとも、假令、死刑にされるやうなことがあつても、この使命を果さなければならぬと言つて、これを敢行したのだといふことである。これ恰も、

法然上人が、念佛停止の嚴命を蒙り、土佐へ流罪ときまつた時、『瀝空に於ては、流刑更に憾みとすべからず。』と言ひ、『頗る朝恩といふべし』と言つて、寧ろ、流罪を感謝せられた心境と、變遷たるものがあるではないか。佛心者大慈悲是也を體する佛教徒として、これ寧ろ、當然なことではあるやうだが、信仰の火が内に燃えて居ないものには、出来ることではあるまい。

溫情を以て温めてやらずに居れなかつたらしい。凡そ君の如く、人の喜びを喜び、人の悲しみを悲むことに、敏感なものは、僕の知れる範圍内に於ては、一寸見出し兼ねるのである。他人の悲喜を自分の悲喜の如く感じて、或は詩となり句となり、或は書面となり、訪問

南天美思齋金
香玉樓盛來瑠
珀光
摸唐人詩
靈月明

海旭上人筆

となり、喜ぶべきは心から喜び、悲しむべきは心から悲しんで呉れた。僕及び僕の一家に關する限りに於ても、その恩は海岳である。僕が結婚したと知つては、お祝ひだと言つて、獨逸から寫眞帖を贈つて呉れる、子供が産れたと聞いては、繪本を贈つて呉れる、その當時の君は、ビール代にも困つて居た頃であつたと思ふが、君は在獨中、盛にビールを飲んで居たが、歸朝後禁酒を斷行した。その中からも、こうしたことを、必ずやつて呉れたのである。これは勿論、たゞ一例を挙げたに

此くの如く、君は、信仰の火が内に燃えて居るか、何人に對しても、

しか過ぎないが、曾て、伊藤仁太郎君が、淺草から、初めて代議士に當選した時のことである、僕が、多年、伊藤君のために應援して來た苦衷を知つて居る君は、わざ／＼車を飛ばして、僕のうちへやつて來て、『よかつたなア、／＼。』と我事のやうに喜んで呉れたこと



もあつた。志はあつても、なか／＼そうまでは出来ないものだと、僕の先姉が、また、涙を浮べて感謝したものである。

佛教社會事業が、君に負ふところが多かつたとか、西光寺が、まるで學生の梁山泊であつたとか國際人のホテル見たやうであつたとか、淨土宗内は言ふまでもなく、全佛教界の安全瓣であつたとか、育英の功没すべからざるものがあるとか、『大正新修大藏經』出版の女房役であつたとか、數へ来れば、君の足跡は、甚だ廣く且つ大きい。中にも、僕の最も嬉しかつたのは、禁酒運動と、廢娼運動との、片棒を擔いで呉れたことである。由來、佛教界は、この種の運動に共鳴するもの乏しく、僕一人、キリスト教徒に伍して、苦戰惡闘を續けて來たのであるが、渡邊君のこれに参加して呉れたことは、實に百萬力であつて、佛教徒の立場を、重からしめたものである。それも今では、一場の夢物語となつてしまつた。

滿洲事變勃發以來、實は、滿洲の開発に關心を持つこと妙からず、佛の鏡泊學園の總長に推され、大に爲すあらんとしたるが如き、これ君の抱懷する、一種の大亞細亞主義實現の、第一歩ともなるべきものであつたが、君の死と共に、學園の生長も頓挫したのは惜しいことであつた。

今や、日本は、建國以來の大難局に遭遇して居るのであるが、同時に、新東亞の建設といふ、痛快無比の大事業が、日本の手に委ねられて居るのである。この時、若し、渡邊君をして在らしめたなら

ば、必ずや、全佛教徒を糾合して、この大事業の一方面を負擔し、相當の實績を擧げるであらうとも考へられるし、最少限度に於ても、一部の人の佛教輕視の觀念に修正を加へしめ、佛教僧侶と殘敵とを、同格に取扱はしめるやうなことの無いやうにさせる位のことは出來たであらうと思はれる。

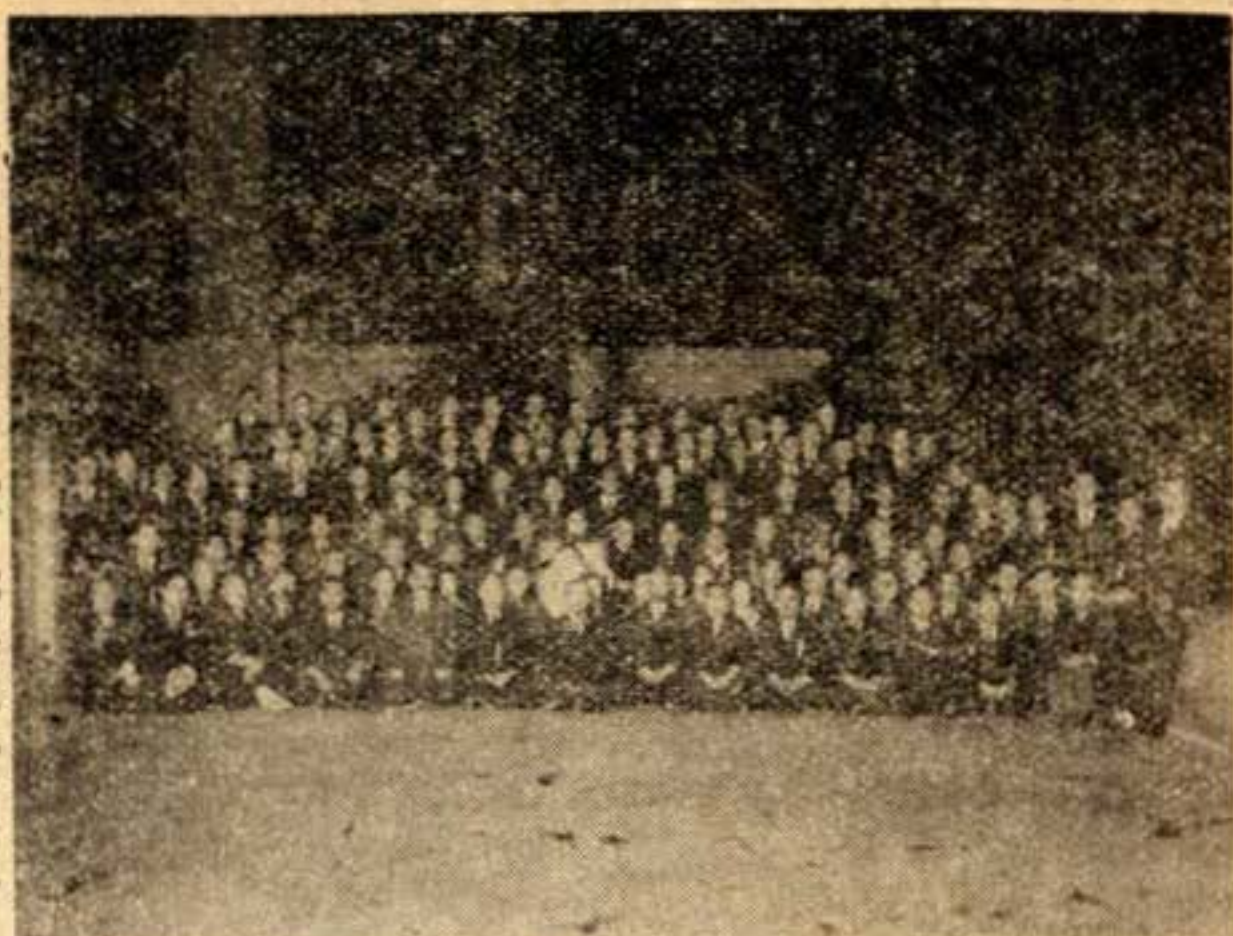
嗚呼。現代の日本佛教界に、最も切要にして、しかも最も拂底せるは、信、學、行、兼備の人物なることを思ふ時、この三拍子揃つた希有最勝の一人たる、海邊海旭君の居ないことは、何としもさびしいことであり、悲しいことである。(昭和一四、一、八)

唯一の叱責

渡邊海旭上人が芝中學の校長をせられておつた當時、一時大分カンニングが流行したことがあつた。こんなことを極度に嫌はれる先生は一日遂ひに全校の生徒を校堂に集めて身を嚴に語氣を勵まして「純眞なるべき學生がこの破廉恥を良いと思つてゐるのか！ わからなければ天に問へ！ 天帝に問ひ奉れ！」と痛嘆された。決して生徒を叱責されたことない上人にして、これが唯一のものであつたと云はれてゐる。またカンニングして友に教へてやつた生徒の父を呼んで「校長として申譯なし、お許し下さい」と、涙に咽んで先生の方から詫びを云はれたと云ふ。

渡邊海旭先生追憶會の夕

本誌記者



一月十五日海

旭先生の御誕生日

である此の日を選

び、門下生の方々

が發起となつて丸

の内中央亭に於て

追憶會が盛大に行

はれた。來會者二

百名記念撮映晩餐の後、井上哲次郎老博士、大村桂巖氏、正木

直彦氏、加藤精神氏、柴田徳次郎氏、川瀬光順氏、笠木良明氏

等交々立つて、興味深く、又頗る有益なるお話をなされた。海

旭先生在りし日を偲び又先生今日健在ならばなどと想像しつゝ

一同寔に感慨深き夕を過しました。左に諸先生のお話しの概略

を皆様に御紹介します。

(寫眞は當夜の記念撮影)

井上哲次郎先生

目下日本は未曾有の大難に直面して一層國民諸賢の憤起を望んでをる次第であるが、聖戰漸く治りつゝあるに随つて、愈々益々其の思想的指導が必要である事を痛感するのである。大事變大戰爭の後に來る可き思想的動亂を吾々は過去に於て味つてをるのである。此の思想的指導は宗教家によつて行はれなければならぬので、特に渡邊海旭君の如き人が現れる事を切望してをるのである。私が渡邊君と相識つたのは明治の卅年、淨土宗教學本校なるものが、傳通院の附近にあつた頃であり。私の宅がその附近にあつた理由からして屢々講演なども依頼された事もあり、又私にその學校の校長になる様にと勧誘を受けた程であつた。その當時、渡邊君も萩原雲來君もまだ學生であつた。私はその頃からして渡邊君の偉才を認めてをり其の頃からの知合ひであり眞に因縁淺からざるものがあつた。萩原君は學究の人であり、一生を書齋の人

學問の人として過したのであるが、渡邊君はその反對に死の直前まで各方面に渡つて活躍されたのである。人柄が非常に親切であり、人を養ひ人を愛する事は寔に尋常でなかつた。渡邊君は一生を人の爲に働いた様なもので、昭和八年一月元旦病を得て芝中學校の禮拜式に參列し教壇に倒れたとの事であるが、此の一事は教育者として實に此の上無き立派な最後であると思ふのである。獨逸留學十二年の内最初の六年は専ら學究に費し後の六年は書齋を出て、大いに活躍をされたので、當時獨逸へ留學された日本學生など渡邊君の世話になつたものが多數あるし、各地に於て研究發表などをして大いに日本人の氣をはいたのである。

明治に於ける淨土宗の高僧福田行誠上人は學德優れ、殊に歌道に於ては見逃す事の出来ぬ達人であり日本歌道史上逸す可からざるで人であるが、渡邊君は梵語學者として優れた才能を有つてをり日本のみでなく海外に迄其の名が響いてをるので、此の點では行誠上人と雖も遠く及ばないのである。又渡邊君は漢文漢詩に於てはなか／＼の達人であり一世を驚かす様な名文を遺してをるのである。此所に渡邊君の缺點を擧ぐれば、其は非常な咄辯であり、實に言葉が不明瞭であつた事である。然し此にしても實は咄辯の雄辯とでも云ふ可きで、心にあふれる言葉を一度に出そうとした爲めであり、其の言葉は言々句々、熱情にあふれたものであつた。

此の點が人を魅きつけた理由なので咄に似て實は雄辯であつたと思ふのである。何時であつたか、渡邊君を導師とした法會に列して、渡邊君の南無阿彌陀佛の聲を聞いたのであるが、實に人を感じさせる様な實に森嚴なものであつた。其所には少しの陰氣くさい所もなかつたので、此も渡邊君の燃える様な信仰の發露であると思ふのである。以上大體思ひ附いたる點を述べたのであるが、渡邊君の今日亡き事を考へ今日此の時局に一層吾々の奮起を望む次第であります。追悼は故人を悼むのみで止る可きでない、故人の長所を取つて大いに學び、努力する處に意味があると思ふのである。

正木貞彦先生

今日日本の歴史を回顧して見ますと、國難と稱す可き、日本の一大事の時には必ず名僧知識が出で、確固たる言を以て日本の處す可き大道を示したのである。今日の國難は歴史に徴しても從來の何十倍にも比す可きものであり、眞に未曾有の國難と云ふ可きであらうと思ふのであります、皇軍は益々その戦果を收めつゝあります、日本國民全體の心が一致協力する力を失つた時を想像すると實に前途暗澹たるものがあるのであります。民心の動搖退却的態度は寔に百萬の敵よりも恐ろしいのであり、此の時に當り正しき思想的指導こそ僧侶に課せられた一大義務であると考へら

れるのであります。

今度の戦争に於て少くとも百萬人の人身を殺戮してをると思ふのであります。敵の此に對しての恨と云ふものは實に掻き消す事の出来ないものであると思はれます。此に對して恨を忘れ靜に結末をつける事は實に至難中の難と云ふ可きであります。此の大事を爲し得るものは一人僧侶の力であると思ふので、特に信念のある、燃ゆる如き信仰心のある宗教家の出現を希望して止まないであります。今日渡邊君の如き人の少き事を悲み、渡邊君を偲ぶ心、寔に切なるものがあります。

豐臣秀吉の朝鮮征伐の時島津久基が敵の死者も味方の死者と共に併せて鄭重なる供養をなしたと云ふ記事が遺されてをるのであります。此うした大乗的な精神は日本の宗教家でなければ出来ない事であります。國難を叫び民心を率ひて大事に當つた傑僧は日蓮上人一人では無く古今の歴史に見て祖師高僧と云ふ可き人々は自ら國難の矢面に立たれてをるのであります。私は此の非常時局に遭遇し燃ゆる如き宗教心ある、又幾百萬人を率ゆる可き迫力を所持した高僧の出現を望んで止まないであり、此所に今日渡邊海旭君を偲びつゝ眞に感慨深きものがあります。

川瀬光順先生

淨土宗の第一回留學生として獨逸へ渡られたのは故萩原雲來先生

生と渡邊海旭先生の御二人であつたのであります。萩原雲來先生をして世界的梵語學者たらしめ、其の盛名を海外に轟かせたのは一方に渡邊先生の並ならぬ御援助、翰旋があつた爲めと想像されるのであります。又石塚龍學先生をして法然上人勅修御傳の英譯を完成せしめたのも渡邊先生の力が預つて大いなるものがあつたと思ふのであります。此の事に就いては私が當時芝中學校に奉職してをつた關係上よく存じてをるのでありますが、當時芝中學校教頭であられた石塚先生を激勵し、時間的に經濟的に多大の援助を與へられたのであります。先生が人の爲に盡された事は此の事のみではないのであります。私の知つてをる範圍で一言のべたのであります。私が獨逸へ参りました時、萩原渡邊兩先生の恩師であるロイマン博士に御面會する事が出来て色々お話をうかづつたのであります。ロイマン翁は渡邊先生を弟子の様にお話しながら、焉も同僚の如く語られたのであります。渡邊先生が盛にロイマン教授の下で研究されてをつた當時、ロイマン教授は、渡邊先生が漢譯經典を獨逸語に譯して述べられるのを、全く汗ダクダクで寫し取り、共に聖典の研究を進められたと云ふお話を拜聴いたしました。此のお話によつて當時の渡邊先生の研究ぶりの一端を知る事が出来るのであります。そのロイマン翁も今は亡く、御面會した時頂戴した、白髮翁の教授の寫眞が存するのみであります。

(文責在記者)

渡邊海旭師を懷ふ

芝中學校長 大村 桂 巖

はしがき

曾て昭和八年十二月發行の大正大學々報第十六輯の渡邊海旭教授追悼號に於て、私は「渡邊海旭氏と宗教々育」と題して、菊版九ボ十一頁に亘りて聊か氏の教育に對する學的批判を論述して置いたから今回は少し碎けて隨筆式に私の常に念頭に通ふてゐる師に對する感想を思出づるがまゝにこゝに書き綴ることとする。

一

先づ第一に師は人徳の先天的具備者であつたと思ふ。作つて出来るものでない法爾自然の人格者であつた。何となく人なつっこい所があつて又一種犯すべからざる威嚴をもつて居られた。一口に言へば人を引き附ける力が備はつてゐた。魅力と言ふかチャームングと言ふか、人間味たつぷりの中に神々しい所があつた。これこそ眞の人格者であつて、誰も眞似て眞似ること能はず、羨んで企て及ぶこと能はず。渡邊式人格の總括的な或るものが儼然として師を構成し

師を守つて生涯を一貫せしめてゐた。これ即ち宗教的人格であつて菩薩とは如此ものならんと想像せしむるものがあつたのである。

二

次には其總括的人格を解剖して見ると、其一は、超脫的高風の毅然たるものがあつて其跡影、禪味に富み捕捉すべからざる所があつた。世人はよく言つた。渡邊先生は禪坊さんのやうだと。……さうしてよく人の意表に出で、思はずあつと言はしめ、開いた口を塞がらざらしめたものだ。大正八年の夏だつたと思ふが、大日本佛教青年會主催の夏期佛教講習會を五日間水戸市の茨城縣會議事堂で開いた時に、私は其幹事の一人であつたので、故木村泰賢君、木山十彰君の二幹事と共に五日間其所に詰めてゐたが、一日、講師の一人たる渡邊師がやつて來て、黒衣に金蘭の小五條といふ出でたちで國上に立たれて。肩書はドクトル・デア・フィロソフィーといふ當時としてはもの／＼しいモダニシ式のものだつた、誰しもがハイカラー

の洋服すがたを想像して期待してゐたのに此始末、それに對して其前日の講師が、日蓮完本門法華宗管長大僧正といふ肩書の本多日生師で、其出でたちが黒の五つ紋附の羽織袴といふ而かも大男の又變つたもの／＼しさで、此兩日の好對照で、五百の聴衆は實際見るなり呆然又阿然たるものがあつたのである。渡邊師に於てはかゝる例は少くなかつた。言外の大説法、身業の大獅子吼であつた。

三

次には、頭腦明晰にして俊敏果敢、而かも平素餘裕綽々としていらぬ時間は座睡して、疲勞を休め英氣を養ふこと傍若無人といふ有様であつた。曾て儘か大正四年であつたと思ふが、京都東山中學校で淨土宗立中學校長會議が開かれたことがあつた。私は其時同校の校長をしてゐたので主人役として奔走してゐたのであつたが、其會議の議案が何か小難しいことで、協議は往きつ戻りつして果てしが無かつた。侃々諤々でもなかつたが中には口角泡を飛ばす人もあつた。然るに其間議長格の渡邊師はぐ／＼肝聲を洩して少時休眠の體、其内に他の人々は議論にも勞れ氣味で、皆言ひ合はしたやうに白河夜船の渡邊師を打眺めて議席は靜になつた。それで渡邊師はふと眼を醒ましてパチ／＼して例の調子で、どうす／＼と結論を促した。そこで他の人々は互に顔を見合はして、いやどうも決ま

らないのですよと答へた。渡邊師は早速紙片に筆を走らして數行さ／＼と書き、案に示してこれでどうですと質す。皆な廻覽して結構／＼これで結構ですと速決、此間僅かに十分餘に過ぎない。私は後になつて偉いものだなと同僚に私語けば、皆な曰く、本當だねえと叩頭す、以て渡邊師の全貌が了解せられる。

四

次は情緒纏綿、詩黨内外に漂ふものがあつた、師が文章に長じ漢詩の大家であつたことは今更ら改めていふまでもないが、實際其性格性情が其詩情の素であり其言行が其詩情の溢れであつた。どこか其れで江戸つ子式、深川つ子式の兄い氣質があつて人をしてほつとせしめる。斯く情歌型でもあつたが又俳句型の所もあつた。

巖山の師の日曜教壇に若い女性が錯集したとか何かの新聞雑誌のゴシップで見たが、さもありなんと當時背いたこともあつた。實際情の人でもあつた。ずつと前にまだ全然禁酒黨にならない時など、ビールに酔つて卓を叩いて、吟詩吟詠など始まると、獨りして音吐朗々し又鏘々、金鑼玉音高吟低吟或は切々或は囁々、いつ果つるとも時の流るゝを知らぬ調子であつた。眞に心淡々として水の如く性溫乎として珠の如く、其情や細かにして人をして離るゝ能はざらしむる所があつた。私がまだ下谷入谷の寺にゐた頃、師が一人でぼつかり拙寺を訪ねられ、私が不在でも座敷に通ほつて家内に話などし茶菓を喫し、時にビールを傾けて飄々乎として歸つて行かれた。高



風の端倪すべからざるものがあつた。家内への手紙にこんなのもある。これは私が昭和五年の暮に米國視察旅行から歸朝した時、ニューヨークで求めたネクタイを一本家内が師へ送つたのに對する禮狀である。

拜復、霜風漸く深く相成最早本年も餘す所幾何も無之候節、益御清康奉賀上候、擬今回は年末御多用中芳思を被爲勞佳品御惠贈を賜はり御厚志拜謝此事に御座候、新春恰好之御品何とも有難く拜用可仕、先は右御挨拶申上度如何候、何卒御幸運御越年之程奉祝候、早々拜具、乍末筆御主人様御始御一同様へ宜敷奉願上候。十二月十二日、渡邊海旭、大村令夫人様、御人に。といふのであつてかゝる手紙を買つたものは感激推く所を知らないわけである。又其かみ大正四年に、渡邊師入洛の時、京都の拙宅に數日間宿泊せられた事があつたが、歸京後畫伯高島北海の筆になる百合の絹本を贈られた。軸の裏面に筆を走らして次の如く情景を識るされてある。共に墨痕淋漓として今では家什の寶となつてゐる、即ち其銘に曰く、

大正四季登極典之後、吾總本山有勅額奉揭之嚴儀、予又得列末班之榮。滯洛終始宿桂巖大村仁兄之寓。萬條古寺孤桐疎松楓紅羅黃幽趣可掬。矧主人友誼人深、遇客人厚、邪治然自適、無驕旅之思。歸京乃贈此畫薄表記念之意。仁兄之盛意愈所感銘也、即題一言言爾。

大正五年八月

東都江東沙門 壹月海旭

師の情熱の迸る所、八十の老翁と三尺の嬰兒とを問はず、一切衆生慈悲隨喜の情に織々たらしむるの他ない。

五

次に師は特に青年を愛し青年と伍し青年を友とし、自ら青年を以て任じ、永く常に若々しく活き／＼として暮らされたことが、吾人の忘れられない一つである。師が淨土宗執綱に就任せられた時、其れのみならず内外多忙の師故、多くの人は師に芝中學校長の職をやめたら如何？ と忠告したのに對して、何を言ふか、自分は淨土宗執綱をやめても芝中學校長はやめられない。と秋霜烈日の相があつた、……世に人を教育する程楽しいものはない。特に青年育成就中、中學教育こそ最も楽しい仕事である。宗教々育の眞骨頂に徹せる師として此言ある寔に所以ある哉である。其昔淨土宗に人物を養成した人が黒田眞洞師なりとすれば、最近の其後繼者は即ち吾が海旭渡邊壹月詩禪であつた。今日師の餘澤に浴せる人々は夫に師の鴻恩に報ゆるが爲に、青少年の指導育成を忘れてはならない。教育的情味こそ眞の宗教の大慈悲の現はれなれ、先德に報謝するもの先づ以て後進の誘掖を第一とすべきである。

六

自信自尊強き中に、襟度宏量にして包容無底の觀があつた。誰でも學德一世に高く識見高邁なる人は、自信強く自尊深く自らに期す

る所がある。これ當然のことであらう。かくして始めて人を導くことが出来、世を救ふことが出来るのであるから。……師も亦其一人であつたが、さりとて決して獨善狹量ではなかつた。其下機下根を憐み、貧窮者に涙を以て對せられたことは人一倍厚かつた。これ師が社會慈善事業に熱心であり且つ幾多の實績を遺し置かれた所以である。一方に於ては颯爽として風を切り千萬人と雖吾れ往かんの自信強く、一度正善なりと自決すれば他の容喙を許さなかつたので、吾人の時々驚かされた場面は少くなかつたが、又同時に時には敵をも愛するといふか、窮鳥懷に入る以上、何としても之を助けねば已まぬ氣象は全く江戸つ子式と言ふか、菩薩の大慈悲心といふか、このお蔭を蒙つた人は今日そこに少くないのであらう。是れが又宗教の園の上にも現はれて、師が一面セクターヤンであると同時に、他面コスモポリタンの如き風もあつて、宗教大會を開いたり、日本宗教協會を興したりして、基督教や神道の人々と提携したり相抱いたりして、道の爲に奔命せられた所以である。

七

最後に最も特筆すべきものは、師の信仰に熱く、道業に精進せられたことである。これ師の學行の中核であり、日常言動の源泉であつたわけである。師



の人格は堅確なる熱烈なる宗教信仰の現

はれに外ならなかつたのである。一例せば渡邊師が多年の獨逸留學を卒へて歸朝せられ未だ數日を出でざるに、友人の慫慂か姉崎博士と高島米峯氏であつたか、杉村楚人冠氏であつたか、留守になるといけないからといふので朝早く深川御船藏前の西光寺を訪ねると、師は既に本堂で木魚を叩いて高聲にて念佛稱名せられつゝあるのでこの新歸朝者のハイカラ、ドクトルの聲カラ振り、老僧振りに先づ一驚してしばし物が言へなかつたといふことを聞いたが、全く渡邊師の信心信仰の熱烈なことは殆ど拔群であつた。故に師は僧侶にして寺をやめたり僧籍を脱したりするものがあつたならば、味噌糞に罵倒され排斥された。犬や猫のやうに言はれた。又た頭髪を伸ばしたり口髭を蓄へたりすることも好まれ無かつた。其私生活なども時々變な眼をして見られたものだ。それだけ信仰に熱く道業に精進せられたのである。其れが遂に禁酒禁煙ともなり、獨身童貞で終ることもなつたのであらう、いやさうに違ひない。

要するに近來稀なる高僧であり、悟つて居られた一人であつたのである。今や、師去つて已に七年、依然寂寞の感が深い、特に此時局非常の際、且つ教界人物拂底の近時、師を懷ふや一層切なるものがある。吾人は師の還來此岸度人天を回向し祈念して已まない。南無阿彌陀佛。(一四、一、一〇)

×

×

×

是後、陽明
 者も思ひ人
 の文苑を痛
 すも情甚切
 ちり、或は
 空回好り、
 同人清原は
 のなる、是
 今の世に
 上成、既、
 す、能く、
 以、其、
 し、献、
 多、を、
 終、を、
 二、の、
 小、を、
 一、下、
 全、

(聖僧旭海上人)

聖僧海旭上人を偲ぶ

赤尾 光雄

大命を拜して非常時内閣を樹立せられ、
 建設日本の大計を愈々強固にせられた平沼
 首相は獨身であられるとの事です。平沼首
 相が獨身生活を爲された理由は私の知る所
 ではないのですが、大事業を成就せんが爲
 め自己の生活を犠牲にした人、天受の才能
 を十二分に發揮せんが爲め獨身生活を送つ
 た大藝術家、大學者など古今の歴史に徴し
 ても其の数は少くない様に思はれます。
 渡邊海旭上人が獨身生活を送つたのは
 僧侶としての本分を全うせられんが爲め
 あつたので、宗祖法然上人は勿論降つて慈
 雲尊者、普寂徳門和尚、福田行誠上人、な
 ど高僧の徳を慕はれ自分も清僧として一生

を送る事を決心されたからです。海旭上人が獨逸へ留學する直前
 高島米峰、境野黄洋、小林正盛、杉村楚人冠、結城素明、安藤正純
 等の諸氏と相結び機關誌「新佛教」を發刊し、濁濁せる當時の佛教
 界を震駭せしめたのですが、海外留學の出立にのぞんでその新佛教
 の雜誌發行の費用として金拾圓也を寄附して、「僕は生涯結婚をしな
 いつもりだから生活費用が諸君より少いと思ふから事業の爲めに金
 を出すのだ」と申されたとの事です。二十九歳海外留學の以前既
 に大理想を立てられてをつた事が想像されるのです。その後十二年
 獨逸から歸朝せられた時、高島米峰先生が海旭上人の獨身主義貫
 徹に相當の危険があるものと思はれ結婚を勧誘せられたとの事です
 が、「少くとも寺院の中で生活してゐる間は斷じて結婚はしない」と
 極めて嚴肅なおも、ちでお断りしたとのお話を拜聴しました。然し
 他の僧侶に向つて「お前も獨身で過ごせ」と強要する事は断じてな
 さらなかつたので、寺院の家庭が愈々益々向上する様に色々お骨を

海旭師と偲ぶ

「江東の災大にして燬
けて遺こるもの無し、
た七言の詩が有ます。

折られ、寺庭の婦人が自己の修養を積み社會に向つて福利増進を計る様色々と懇切に御指導せられました。寺院の家庭が一般社會の家庭の範となる事、此が海旭上人の理想であつたのです。昭和五年八月號の婦女界に「婦人に寄する言葉」と題して結婚と夫婦生活について論ぜられてをられるが、次にその一節を掲げて見ますと「國家社會の發達も、人類全體の幸福も、みな良き女性の力によつてのみもたらされるのです。これは否みがたい事實でせう。日本が今日の國家を持つて世界的に進出したことは實に過去における良妻賢母の賜と云つていいのです。形ばかり見て内容を見ぬと、とんだ間違が出来るのです。良妻賢母は丸籬や小笠原流ではありません。精神の問題です、正しい心の問題です、婦人の人格の問題です、氣運がずん／＼伸びて行く獨逸の婦人の現在を見て今の馬鹿／＼しい生かぢりの所謂新しい、女は、多少とも反省する所を見出させう云々」とあり、純粹な夫婦愛と人格の向上とは皆信仰の力によつて得られる事を述べられてゐます。此の一節に依つても海旭上人が日本女性に對して正しい御理解のあつた事が覗はれます。

大正十二年九月一日のあの大地震の時深川にある自坊の西光寺も大火災の爲め全く灰燼に歸したのですが、その時の感想を述べられ

幾萬か妻を喪ひ亦兒を哭く、説く事を止めよ寒僧に此の苦亡しと、書を焼きて、卷々妻兒の若し、一時の大意は、江東大地震で財産を失ひ妻子を失つて歎き悲るんでゐる人々が幾萬人もあるが、お前には妻も子も無い貧乏な坊主だから此うした悲しみはないんだらう、など云つてもらつては困る、自分は妻や子にも喻ふ可き最も大切な書物を悉く焼いてしまつたと云ふので、獨逸留學以來愛蔵して居つた又と得難い貴重な書物や研究資料を悉く焼失した悲しみを述べて居られました。實際に海旭上人は書物に對して非常な愛着を持つて來られ、家族のものと夕食を共にし愉快な夜を過される事が屢々あつたのですが、十時を過ぎると必ず自坊の西光寺へ歸へられ、ど



像銅人上旭海の庭校學中芝

んな雨風の日でも厭はれなかつたので、たとへ親戚の家でも外泊はせられなかつた。所が自坊を焼き妻子にも譬ふ可き愛蔵の書を焼いてしまつた震災後には、親戚の子供等とトランプや將棋などに夜を更し、お泊りになる事もたまにはあつたのです。御自分でも一僕は震災前は必ず書齋に歸り夜更けるまで、書物を読み日記を附けてから寝るのが例になつてゐた」と申されてをり、獨逸留學當時から一日も缺かさず日記を附けてをられた。その日記帳も灰燼に歸して震災後の數冊が存するのみです。

昭和八年の一月十五日頃病勢が悪化し、自宅での療養が何かと不便であつたので、門下の御一人である三好海和師などは非常に心配なされて、入院をお勧めし、寢臺車も門前までお迎へに來たのであつたが遂に入院を御承諾にならなかつた、ベッドの方がお樂であらうと取り寄せた寢臺も一日使用したのみであとは通常のお蒲團を用ひられた。看護婦を呼ぶ事は絶対に禁止せられ、僧侶の臨終に、醫者よ看護婦よと騒ぎ立てる不作法を叱責せられた。其の時の嚴肅な面もちを今も私は忘れる事が出来ません。長逝の三日前の一月廿三日、大正大學宗教學科の俊才田中芳全君が夭折せられその追悼會が増上寺で行はれた時、海旭上人は床上筆を執つて追悼の辭を書かれた。其が絶筆となる事を誰が豫想したでせう。私は折よく來會せた佐藤密雄氏と共に硯を持ち、巻紙を持ち横臥しながら、すらすらと紙上を染め行く墨痕をじつと見つめて思はず身のしきしまるの

を覺へました。「殘雪に君の遺骨の小寒さよ」の一句を残して筆を絶たれた。今日も其の絶筆を取り出して靜に拜見したのですが、臨終の當時を追憶し寔に感慨無量であります。

海旭上人は次の様な事を述べられた事があります。「自分は人間としては大失敗をしてをる。其は正當な家庭を持つた社會人となり得なかつたからだ、立派な家庭を持ち立派な子供を育て上る事は社會人としての義務だから」と、然し事實に於ては全く其の反對であります。芝中學校長として幾千の日本男兒を薫育し、自坊に於ては數十人の子弟を教養し、幾多の俊才有能の士を社會に贈り出してをられる。現代の社會は、山の中に籠り堂宇の中にのみ冥想する僧侶を要求してはゐません。海旭上人の如く身は清僧として持戒して、しかも社會黃塵の中に交り世道人心を指導する沙門の出現を切望してをります。自我の固執と自利の欲望が佛道と正反對の行ひである事は誰でも熟知してゐます、然し海旭上人の如く一生を通じて奉私の生活、沒自我の生活に徹底する事は至難の事です。大陸建設の重大任務を有つ吾々が、今日海旭上人の遺徳を偲んで寔に呵責の念に堪へない次第です。

いつはりの有る世なりけり吳竹も

花と見せたる今朝の淡雪

(渡邊海旭上人)



京都府 都司島誠也

明けきらぬ華頂の山の朝霧の中に
ほのぼのゆるるみあかし

(評)

清浄な大寺の朝まだき、霧が塔をも
屋根をもはた樹木をもうつすりと包
んで仄くらしい。その霧を通して木堂
内陣のみあかしのやすかに揺れ動い
てゐる景を印象的に詠んだものであ
る。

北海道 押野 尚秀

わがごとき貧しき者の施しを待つ
者のあり軒の雀ら

(評)

わが如き貧しきものと強い調子で作
者は自分の境遇を訴へながら後半に
於て、その貧しき中から閑、可憐な
雀らに與へ得る餘裕のあることを喜
んでゐる。

大阪 吉原 夏生

堂閉づる音の聞えて比叡山は曇れ
る中に寒くたそがる

(評)

寒い曇り日の夕ぐれである、叡山の
講堂の扉を閉ぢる音がたそがれの人
のない山中にひびいてきたきだに寒
い作者の心を一層寂寥に迫らんと
思はれる。

東京市 三浦 順子

庭隅の菊さへ枯れてますらをの文
にはさまん花も絶えたり

京都市 福島孝治郎

街路樹に月芽えたれば屯兵のこよ
ひしづかに物買ひありく

大阪市 渡邊 淨泉

神わざを醜の國らに示すべし勇み
征き征け吾が友よ征け

山口縣 満 永文正

何ごとともたゞ大いなるみ力に仕せ
てわれの稱ふ念佛

山梨縣 杉本 延子

みほとけのたまへる親ぞまた夫ぞ
心やすけくたのしきたつき

堺市 笠井 松枝

何事も彌陀にまかせて朝夕に祈る
こころのやすらかにして

北海道 中村 もん

妄想の絶え間なき身もみ佛のみ名
となふれば心安けし

樹木縣 大輪 清

ものすべて清らに白し降り止みて
笹をばすべる淡雪の音

北海道 花田 順住

大君のみとこかしこみ武士のかず
に入る身ぞ響れなりぬる

栃木縣 萬壽 云海

もののふの命もてする礎は永久
に光らん東亜の上に

朝鮮 望江 八年坊

半島の眞冬となりぬ冷えし身を炕
に暖む大寒のけふ

福岡縣 増谷 観海

みいくさに出でししるしの旗見え
て離れ小島に照る朝日影

千葉縣 高橋 美矢子

むれからすねぐらに歸り風落ちて
しづけき空に月ののぼりぬ

神戸市 秋田 里二

御寺の木々の梢のうら枯れてうら
さびしくも暮るる冬の日

天津山 田 昇

わが歩み此宵は重し病む人はやす
き眠りに入りたまへるや

山口縣 三吉 繁正

大陸の凍れる土の上に寝て年やむ
かへんもののふ偲ぶ

大阪市 神谷 孝周

千早振る神の妻か朝日かげさやか
に映ゆる沖の島々

香川縣 八十八 翁

春きぬと云ふ音づればきこえねど
ふるさとの野は霞立ちけり

京都府 貝利 吉

故さとの名物なりと送りこしうい
路の甘し昔おもほゆ

京都府 黒野 智善

元旦の祝ひの膳に向へども戦おも
へば心はるけし

福岡縣 三浦 壽子

戦傷の白衣の勇士返り咲く今日の
佳き日の麗なりけり

京都市 永田 七郎

書き初めを戦地の友へ贈るなり無
事長久を祈る文もて

小樽市 中村 茂樹

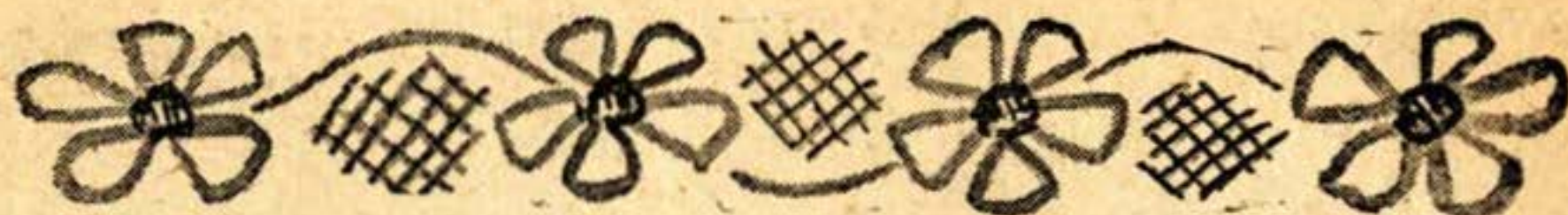
降りつもる雪にもの皆埋れつつた
だ松のみぞみどり色濃き

宮城縣 前原 仁廣

大陸はいふまでもなし大海の小さ
き島にも射す初日かな

投稿規定

官製はがきに一回二首以内
とし「浄土」編輯部歌壇係
あて送ること。



淨土教と現代

故 渡 邊 海 旭 師

一、淨土教の佛教に於ける位置

- イ、空門に於て
- ロ、無我因縁に於て
- ハ、大智慧に對して
- ニ、理觀に對して

(以上前號掲載)

二、現代思想と淨土教の特色

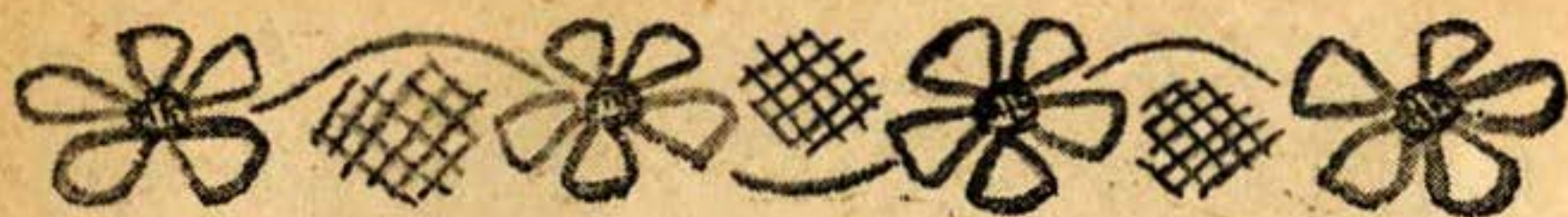
- イ、普通の救濟
- ロ、實行主義
- ハ、形式儀禮の徹廢
- ニ、直截簡易
- ホ、現代批判力(厭欣)

二、現代思想と淨土教の特色

イ、普通の救濟

淨土教は宗教上に萬人共通の道である。これは社會上から言へば、大平民主義である。それは一部特權のものに限られたものでなく、如何なる階級にも向くものである。

法然上人以前の佛教は、傳教、弘法等の天台眞言が堂々と立てられ、日本文化も大に進み、その建築藝術に於ても今日に彼の平安の美を留めてゐる。平安以前の佛教は堂塔伽藍の壯麗を致したが、それは又、公卿上流の一部特權に結縁され



たるもので、下流貧困者は堂塔も建てられず、小なる宗教行事すら営まれなかつた。平安の「櫻かざして今日もくらさん」の佛教は、太平の中に華美かな法要、法華舞ひ、維摩會など催し、宮中でも元日から大晦日まで種々法要を営まれ、金銀の寫經、曼陀羅、佛像等を製作せられたが、何れも一級的のものではなかつた。

かやうに平安以前の佛教は貴族特權の佛教であつたが、稀には民衆の爲めに盡力するものもあつた。即ち平安末期に出た春朝は、名僧であるが、獄中の囚徒にまで佛教が入れられねばならぬと考へ、自ら獄に下つて法華經を讀み、囚徒はその微妙なる聲に涙して教を受けたと云はれる。又、和氣清麿の姉に當る法均は、日本社會事業の始祖と云はるゝ人であるが、戦亂に際し叛軍の遺族を保護救済したと云はれる。これら春朝法均等も大體は貴族佛教に屬する者ではあるが、一般に當時はこれらの少數の例外を除いては、益々僧侶が權勢を占め、往々不逞の徒まで入り来るやうになり、武家浪人の暴力團ともなり、山法師が叡山に入るなど、宗教の權勢は益々高まり、その宮中政朝との關係は深まり、僧兵を養成するやうにもなつて、全く佛教は御用化されてしまつた。

それ故、何うしても何人も同じく救はるゝものがなければならぬ。今日では我々も高位の人々も同じく陛下の赤子として自由の權利を有つてゐるが、これが日本國家の上から當然である。上人の教も亦この精神による。これまでは富有でなければ儀式も寫經も出来なかつた。學問教育、權勢等が無ければ佛教が解らぬとあれば斯かる佛教には價值がない。上人の教は誰にも同じ救ひが得らるゝ教である。上人以前の佛教にも斯かる教はあつたが明瞭には示されなかつた。然しこの普遍的救済の教は現代思想に最も適切なるものである。學問ある者も財力あるものも、學問なきものも財力乏しきものも、皆同じく救はれると云ふのが淨土教である。上人の門下には關白もあれば遊女もあり盜賊もある。又學者もあり無智者もあり、これらが皆同じ道に進んだ。即ち上人の教は、たゞ彌陀を信ずる力によるもので、學力財力地位等が何等その條件とはならぬものである。

眞言には、經を誦するものは地位を得るとか、學力地位等なければこの經は誦し得ぬとか云ふ教がある。然し淨土教は赤裸無一物で信ぜられる。貴賤善惡の別なく救ふのが、淨土教である。宗教を誦し反抗し迫害する者までも救はれるのである。日本國民性として國民は同一赤子として齊しく立ち上がり行くべきであるが、宗教上には特權に非ざれば救はれ

ぬことになつてゐたのが從來の佛教だつたのである。故にこの上人の平等なる教は、その國民性より見ても、最も適切なものと云はねばならぬ。

ロ、實行主義

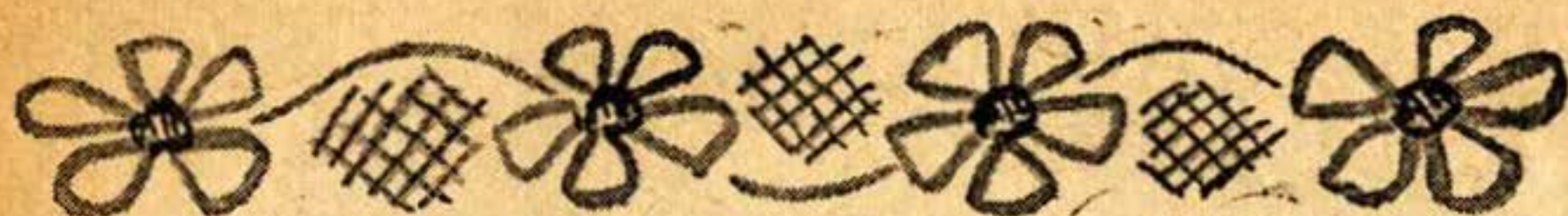
次に、法然上人以前の諸宗は學問中心であつて、教學研究を主として實行には見るべきものが無かつた。然るに上人の教は實行に重點が置かれた。難解な學問よりも簡単な實行を根本とした。現代の政治、經濟、倫理の方面にも徒らに理論を事とするものがあるが、之に對して實行方面を考慮せしむるものである。即ちアメリカのプラグマティズム（實用主義）などの立場である。

昨今、伊太利のファツシヨ運動や獨逸のナチス運動の如き、理論よりも力ある行動を第一とする主義が擡頭し、又學問上にも教育上にも、單なる裝飾的研究に止まらず、人間活動の上に實際的なものを要すると云ふ見地から、その改革が行はれてゐる。淨土教の立場はこれである。難解なる理論方面は第二として、直ちに教はるべき道を第一とした。これ現代に必要とする實行主義に似てゐる。滿蒙問題も實行主義なればこそ斯くも進み得たのである。少くとも現今實行主義の風潮あり、且つそれには少しく缺點はあるが、この手つとり早く實行することは必要なことであり、又これが日本の性質である。然るに明治以來、外國の研究主義を容れて、その系統組織のみを重視した。

上人以前の佛教は研究が主であつて、著書としても相當のものが出て居る。然し、研究は終に研究を出でず、生活上の饑えを凌ぐものではなかつた。上人入寂の直前或る高僧が一夜夢に、大寺の門柱の邊りに疲れたる多くの乞食の群に上人が粥を與ふるを見、夢さめてこれこそ上人の教なりと知つたと云ふが、民衆の饑えに與ふる直截、明快なる宗教、これは研究主義にならず、實際主義に立つ宗教でなければならぬ。

ハ、形式儀禮の徹底

第三に淨土教は形式儀禮を主張せぬこと。形式儀禮に執はれた所に人間の價值を見出さない。平安奈良の時代には儀禮

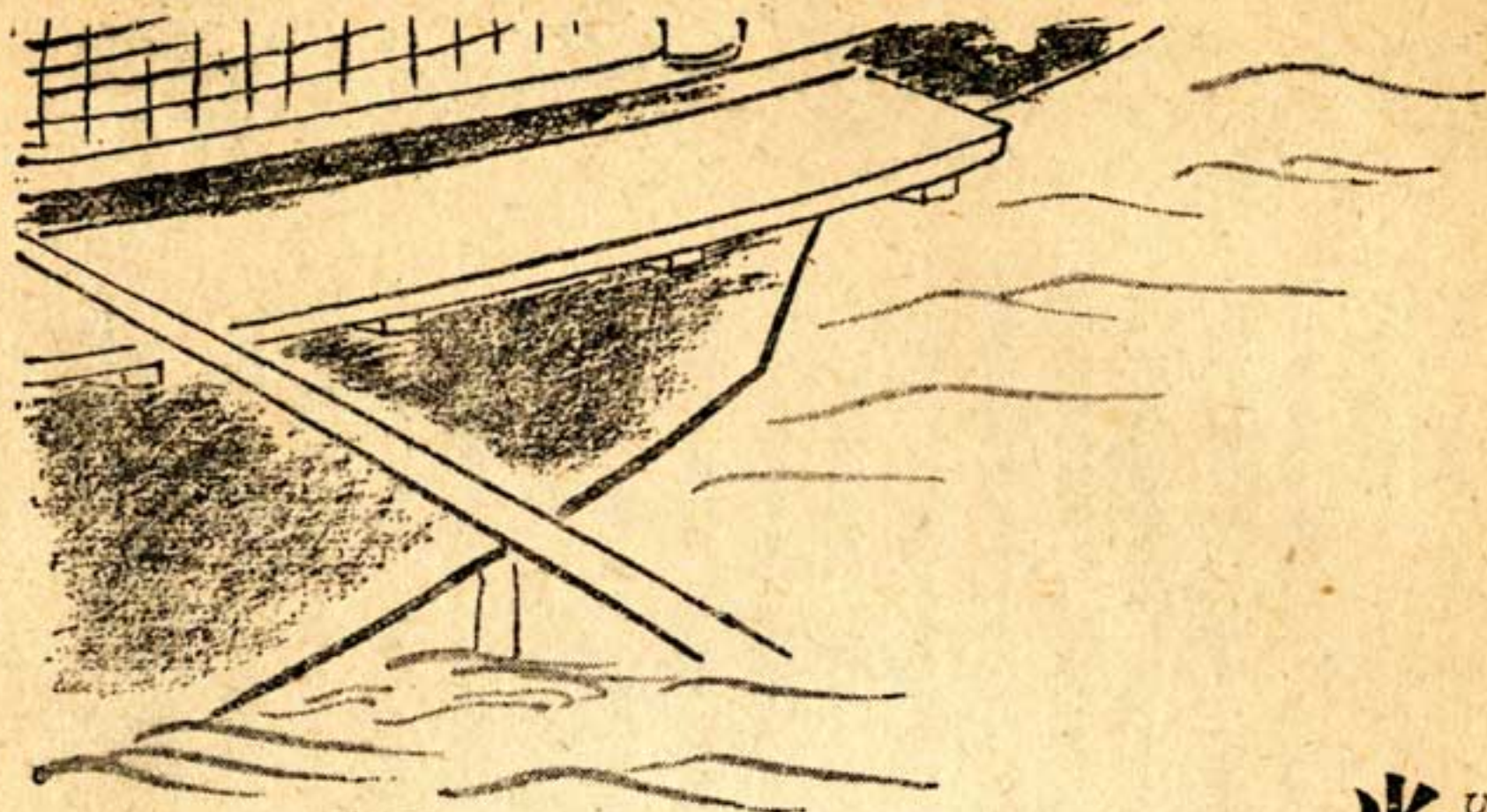


が盛に行はれた。ことに上流階級には之をやかましく云つて盛に行つた。これがため當時出た佛教は皆形式儀式の佛教であつた。これが又現今の宗教の一面を成して居る。法然上人は形式儀式伽藍の佛教の中に出でて、形式なき伽藍なき佛教、即ち信念で行く佛教を教へられた。上人時代の服装は男は束帯、女は十二單衣と云ふやうに僧侶も立派な法衣を着けてゐた。然し斯かる外形上盛なる佛教の中には腐敗があつた。上人に比して遙かに學なく徳もなきものが盛装してゐたが、上人は粗末な麻衣、鼠袈裟、金剛草履と云ふ装ひであつた。これが淨土教の第一平民主義を意味してゐるのである。これは現今の精神によく適してゐる。又上人入寂に先立つて、その門弟達が集り、佛教は比叡山に、弘法は高野山にその遺跡をとむ、上人も一宗の開祖なれば遺跡は何處に定むべきかと上人に尋ねた處、上人は「あとを一廟にしむれば遺法あまねからず。予が遺跡は諸州に遍滿すべし。ゆへいかなとなれば、念佛の興行は愚老一期の勸化なり。されば、念佛を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし。」と云はれ、自ら草庵に安せられてゐたのである。又ある人が上人に對ひ、信仰するには儀式が要るかとなつた時、上人は、たとへ肉食するも、よし、それに依つて信仰に入れぬと云ふことはないを教へられてゐる。

こゝに淨土教の尊嚴があり、又、現代に於ける形式を廢して自由を求めんとする思想傾向とよく適合する所以がある。現代には斯かる何ものにもこだはらぬことが要求されてゐるのに、その一面に形式的な自分の態度に囚はれてゐる點が窺はれるのは遺憾なことである。

「私共が念佛するには何うしたらよいか」と自分の生活と念佛の關係とを尋ねた時、上人は「汝はたゞ念佛が出来りやうにやればよい、資財あつて念佛するもよし、山に入つて念佛するもよし、とにかく常に念佛第一主義で一切は念佛の助けとなるものと心得よ」と云はれてゐる。即ちそれは生活の中心としての宗教である。田地を有つても、資本を有つても、それが念佛の爲めであればよい、無産でも有産でも、それが信仰中心であればよいのである。かゝる立場に生活中心の佛教が見られるのである。

一面に於て、自由を求め、形式儀式を破壊せんとすると同時に、他面に於て、あまりに自らの階級に執はれてゐる現今に對して、淨土教は救ふべき大いなる力を有してゐると思ふ。(續く)



光^{ひかり}を あ び る 人^{ひと}々^{びと}

吉源 田 細
畫平 金 木 鈴



上人流し前後

「これからお念佛を申すと打ち首ぢやさうな！……昨日は住蓮さまが近江の馬淵で處刑になつた！ あゝ、恐しいことになりをつた」

と、一人の信徒が競々と呟つのだ。

「住蓮さまは女犯に關係があるからぢやさうな？ したが、お念佛まで禁じられずともよかりさうなもんぢや？ それに……」

と、もう一人の信徒が、四邊を憚るやうに

「お上人様を流罪にするさうな！」

「その噂は、わしも昨日聞いたばかりぢやが……えらいことになり居つた！ あゝ、七十二といふ御老齡のお上人様が、流罪ぢやさうな！」

「な！」

「一體、どこの國へ流されなさるのか？」

「土佐ともいふし、また讃岐ともいふて居るらしい……」

「あゝ、わしどもの身體で勤まることなら、お代り申したいが、こればつかりはどうもならぬ！」

互ひの眼には、もう一杯に悲痛な涙がにちみ出て來た。

「南無阿彌陀佛！」

「これ！」

と、一人が素早く、その口を抑へないばかりに制しながら、つい自分でも、

「南無阿彌陀佛！」と、一度二度くり返し、ふつと固く口を噤んだ。四十三歳で淨土宗を開いてから、法然上人は今年で三十餘年も衆生濟度を續けて來たが、その教義の上での問題には、まだ世人の論議もとやかく喧しいとはいへ、然しこの度の念佛禁止事件くらゐ周囲の僧や信徒などを驚愕させた出來事もなかつた。

それは今から八百七十三年も前のことで、建永二年もまだ春寒い二月といふのに、念佛行者の肉食女犯が南都北嶺の抗議に口實を興へたわけで、門下の安樂は六條河原で、次ぎに住蓮が近江の馬淵でそれから善緯や性願まで死刑となつた。すこし輕い方で、淨暉房は備後へ、禪光房は伯耆へ、好覺房は伊豆へ、法本房は佐渡へ、めいめい流罪となり、また善信房親鸞も、この度同罪ときまつて、適々越後へ押送された。

そこで師の法然上人は、僧籍を剝かれ、藤井元彦と改名され、彌生の春にそむいて慇々土佐へ流されることになつた。

「どうかしてお上人様をお助け申せないものだらうか？ かういふ時に、門弟の圓照様も、以前の攝政の勢ひで、なんとか御捨免をお願ひ出來ぬものか？」

などと、巷の信徒は、あれこれと無い智慧を拵つてみたが、今は門弟圓照様も、以前の攝政藤原兼實の豪勢を招き返すよしもないのだつた。有名な「選擇本願念佛集」を撰したのも、他ならぬ兼實卿の御信賴であつたし、この一書に淨土門の眞髓ありとさへいはれ

るほどであつたが……。今は念佛も迂濶に唱へられもしないのだ！

振りすて、行くは別れのはしなれど

ふみわたすべき事をしぞ思ふ

これが、圓照房先きの兼實卿がお別を詠んだ一首だ。

露の身はこゝかしこにて消へぬとも

心はおなじ花のうてなぞ

この御返歌を以つて、法然上人は深い信仰の契りある兼實卿へ永訣を告げられたのであつた。

三月の十六日、京の春もこれから闇にならうといふのに、上人は愈々流罪の一步を踏み出すことになつた。門弟も信徒も、この世の限り悲嘆にくれ、老ひたる上人の袂にすがつて泣くばかり、信濃の武士角張の成阿房が率領となつて、老師をお興に乗せまゐらせ、法性寺の門前から鳥羽の船場まで扈從した。その門弟は六七十人に及び、町々には善男善女が壙をつくつて

「せめてお上人様のお興なりと拜みたい……」

と、涙ながらひそかに念佛を唱へ、しまひには行列に従つて長い道中を慕ひ歩くのだつた。そこで、勢ひお興の進みもおそく、道のべにすこしでも立ち停ると、そのまゝお興にとりついて、聲をあげながら別れを惜みつけけるのだつた。上人はお興の中から、

「泣いてはなりません。もろこしには一行阿闍梨、日本には役の優婆塞、聖人といはるゝ御身を以て、これと同様の思ひをなされたの

ぢや！ 菅原道真卿のお心持もいかがであつたらう？ それこれに思へば決して泣くことはいらぬ……。たとひ百里千里と隔つるともお互ひはかならず朝夕淨土で會ふてゐよう！ 泣くな！」と言はれた。

鳥羽の南門から川船で下り、十八日には攝津の徑ヶ島泊り、そこで法然上人は都も知らぬ質朴な漁民を教化されたが、次ぎに室の津に船が入つた時、それはもう薄暗くなりかけた晩方であつたが、一人の女をのせ、しきりと漕ぎ寄せる小舟を見つけた。

遊女むせび泣く

小さい船には、細やかな若い女が蹲つてゐる。早くもこつちの船頭たちが、ざわめき立つて、自分たちを目がけて來た化粧の女と思ひ込んでしまつた。

名だゝる室の津のこと、宵闇が迫り、港の町になまめかしい灯がきらめき出したのだから、船頭を咎めるわけにはいかない。

室の津といつたら、西國方面との海上交通の要港で高麗唐土の使客商人の交易絶え間もなく、大明の金華縣に倣つて金華津ともいはれたくらゐ。室の遊女はわけても世に知られたものだつた。

こちの船中の客までが、てんぐに顔を突き出し、小舟の女を調戲ひはじめたが、然し宵闇の下の方から何やら叫ぶ聲は眞剣だつた。

船頭は、二三度、聞きそこねたやうだが、

「京からお下りの法然上人様は、このお船でございますか？」

と、眞剣な女の叫び聲が、やつと聞きとれた時、船頭も客も意外な顔を見合つた。

「坊様か？」

「法然上人様でございます！」

「なアんだ、坊様に御用か？」

「どうぞ上人様にお逢はせ下さいませ！」

せ！」

「……逢はせたらお咎めになるでな！」

な！」

「さうおつしやらないでお逢はせ下さいませ！」

「お願ひでございます！」

ほんの、僅かの間で結構でございます！」

す！ どうぞ船頭さん！」

さつきから法然上人は、船の一隅で客や船頭たちのざわめいてゐる様子

子を、静かに見遣つてゐられたが、

「わしなら、すぐ逢つてあげる！」

呼び上げたがよい！」



と、船頭へ聲をかけられた。

客たちは、一寸解しかねたやうに

あつちこつちでざわついた。船頭も

何やらふざけながら小舟の若い女に

手をかして乗り移らせた。

見ると、十八九歳のみづ／＼しい

美しい女！ 薄暗い灯の影ながら、

うやく／＼しく上人の前に手をついた

様子は、化粧の女とも見えないほど

立派で品があつた。むろん室の津で

も、とりわけ嬌名を謳はれてゐる遊

女、客も船頭も、いつか固唾をのん

だやうにこの異様な——七十五の老

上人と、水も垂れるやうな美女との

邂逅を、まぢ／＼と眺めやつてゐる。

「突然、お願ひいたしましたのに、

お目通りをお許し下さいまして、勿

體なうござります！ 妾ごときた

はれ女、生きながら地獄に墜ちた身

が、お上人様にちき／＼お目にかゝ

れやうとは、まるで夢の中に居るや

うでございます！ 南無阿彌陀佛！ 南無阿彌陀佛！ どうぞ、見苦しいたはれ女でございますけれど、深い御慈悲にすがらせて頂きたうございます！」

と、遊女は感極つて、そこに泣きながらひれ伏してしまつた。

「若い身空で、可哀さうに苦勞を嘗て居るやうぢやが……彌陀如來は、必ずお救ひを下される！ 安心なさるがよい！」

「あの、妾ごとき罪業の重い者でも……？ それはまことでございませうか？」

「何とて嘘をいはふぞ！ いかにもそなたの罪業は罪深い！ その罪障は、早う洗ふてしまふがよいが、それはなるまい？ さぞ朝夕胸のうちの苦しみが辛からう！ 出来れば、さつぱりその罪業を捨ててよりないが、まづそなたが一心に念佛するなら、その場、そのまゝでも救はれる！ 彌陀如來は、決して罪深い人をお捨てなされはせぬ！ 罪が深ければ深いほどその罪み人をお救ひなされるのぢや！」

「それにしましても、妾ごとき卑しい女が……もし念佛によつてお救ひして頂けるならば、あゝ、何と勿體ないことでございませう！ 臆しい罪業を思ひますたびごとに、なぶり殺しに逢ふやうな責め苦を感じます！ もう神にも佛にも見捨てられた女とばかり思うて居りました！」

いふうち、またしても遊女はさめくと泣いた。「……妾は、生

れ落ちるなり、不仕合はせの女でございました。生みの懐しい母は妾を生み落すなり産後の肥立ちがわるくて亡くなりました。誰れ彼れから聞きあつめました話では、生みの母は極く人の好い親切な性質だつたとか、佛さまのやうにやさしい方だつたと申しました。それに引きかへて、父親の方は「人非人」とまでわるく噂された人でございましたが、母親が亡くなりましたからは、いよいよ極道がつのりまして、まだ幼かつた妾をば賣り飛ばしてしまつたのでございます。その後、人づてに聞きました父親の噂は、かなしいことばかり……あの恐しい／＼追ひ廻り、強盗、人殺し……ありとあらゆる悪業をいたして居るさうでございます！ お上人様！ このやうな罪深い父親は、どうなりますこととございませうか？ 救はれる時がございませうか？」

「聞くだに恐しい話ではあるが、決して疑うてはなりませんぞ！ 彌陀如來の御慈悲には、あれこれの差別はない！ 必らず／＼そなたの父親も救はれよう！ そのお救ひの時が、早いか晚いか、それはやむを得ないことぢや！ したが、そのやうな悪人だけに、深い罪障にふつと目さめる時が来るものぢや！ ゆめ／＼疑うてはなりません、念佛を唱へ、心を弛めてはなりませんぞ！」

「ありがたうございます！ お上人様！ しかとお言葉を忘れませぬ！ そして罪深い父親をも妾と共に救うていただきます！ あゝ、今夜といふ今夜は、何といふありがたいこととございませう！」

どこかで、切り取り、強盗、人殺しの深い罪障を擔つた父親も、きつと我が罪障をかへりみて居りませう！ それにしても、父親といひ妾といひ、何の爲めにこの世の中に生れて來たのでございませうか？ 人の爲め、世の爲めにはならず、却つてその逆に人をたぶらかし人を殺めて生きるとは！ あゝ、何とあさましい親子でございませう！

「いや、そのやうに卑下ばかりするものでない！ まだ念佛の功德を知らぬうちは、いたし方もないが、罪障の重い身にも彌陀如來の御慈悲は、さん／＼とふりそゝがれて居るのぢや！ 只、罪障ゆるに本人がその御慈悲を知らずに居るだけのことぢや！」

「ようくわかりました！ 妾ごときたはれ女さへ、かうして生かしておいて頂く！ あゝ、これが御慈悲でございました、阿彌陀如來の御慈悲は、またお上人様の御慈悲でございました！」

またしても遊女はうれし泣きに泣いて、涙の中から法然上人を仰ぎ拜み、さて限られた廊の時に氣がつくと、またしても身悶えした今夜もつらい勤めから遁れられない身體ではないか！ このまゝお上人様にお従ひして、どこの國どこの涯なりと行つてしまひたい！ 然し、それは出来ない願ひであつた。が、いや／＼、お上人様のお傍に居る居らないに拘らず、阿彌陀如來の御慈悲とお上人様の御慈悲は、この賤しい身體にさへ惜し氣もなく降りそゝがれてゐるのだ！ 大きい安心と、深い歡喜から、遊女はいくたびも上人へ拜をくり

S.S.S.

一億同胞 一心の固りこそ
日本の眞の力である

一本の金ペンも

十本 百本 千本となれば

莫大な金塊となります

ペンは

サンエス耐酸萬年筆

一、五〇以上



返し、船を下り小舟で引つ返して行つた。

「南無阿彌陀佛！ 南無阿彌陀佛！」

遊女からも法然上人からも同時にその名號は靜かな夜の海面へと消えて行つた。船頭も客たちも、思はず、

「南無阿彌陀佛！」と、一緒になつて唱へ合ふのだつた。

盜賊の法身

その建永二年も、門弟信徒の涙のうちに暮れ行かうとしてゐたが俄かに法然上人は赦免となつた。そこで攝津に移つてふたゝび大谷に庵を結ばれることになつたが、お弟子の一人、教阿彌陀佛と名乗る男が、この庵に寝泊りして、朝夕上人のお世話をした。

この教阿彌陀佛は、以前河内の國で押入り強盜をしてゐたといふ、あまりよくない噂の持ち主だつた。門弟や信徒の中には、

「お上人様も、あの男をお傍において居られるが、飛んだ御迷惑をなされねばよいが？」

と、ひそかに案じ煩ふ者もあつた。また、

「あのやうな惡黨が、御慈悲を受けて、正業の人達と同じやうに生きて行けるとは、をかしたことはないか？」と、不平不満から陰口をいふ者もあつた。

時には、周囲の人達のそれらの吹きが、法然上人の御耳に入ることもあつたが、そのたび上人は、むろん軽く一笑に附して居られる

のだつた。

教阿彌陀佛としては、惡黨だつただけに、周囲の人達の怪訝な表情を氣づかないわけはなく、然しそのたび、

（只、おれはお念佛申して居ればよいのだ！ それどころか、かうして人並みに、いや、このやうに特にこの庵の生活をお許し下さるこの身は、何といふ果報者ぢや！ この上にもとやかく我が前身をあざむき終はさうとは、あまりに強慾であらうぞ！）

と、ひたすら自分を戒め修行にいそしんでゐた。

或る夜だつた。教阿彌陀佛は、おそく臥床に入つたが、こし方を考へ行く末を思ふうちに、いよく目が冴えて來た。かうなると、教阿彌陀佛のくせで、地獄での恐ろしい火焙りの責め苦と同じやうな辛い苦しみ、全身を痺と壓しられるのをどうにも出來ないのだつた。

路傍で、血をふいてのたうち廻る旅人がある、かと思ふと、財寶を盗られて泣き狂ふ老人が見える、娘一人の中から、出しぬけにうつくしい娘を濡はれ、追ひすがる母の呼び聲が聞えて來る……死んだ妻の顔がうらめしさに浮び、幼い時分に賣りとばした娘のことが案じられて來る……。教阿彌陀佛は、濡すまいとしても、責め苦のくるしみから、つい吐息を漏し、すぐ氣がついてそつと呼吸を殺した。

（あゝ、おれくらゐ惡人はない！ いくたり人を殺めたか、いくたり人の財寶を盗みとつたか……！ それが、今になつて苦しいと嘆いては、あまりに罪障が空恐しい！）

目をつぶり、一心に阿彌陀佛を念じ、口疾に……南無阿彌陀佛をくり返してゐた。

すると、その時、隣室の上人様のお部屋の方で、もの音一つしない静けさを繼ふやうに、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……」

と、低い、かすかなお念佛の聲が聞えて來た。

（あのやうにお上人様がお念佛して居られる！ ああ、ありがたいことだ！）と思つた教阿彌は、思はず身體を起し、居坐を改めた時、隣室のお念佛は、ひた、と止んでしまつた。

（あッ！）

と、教阿彌は魂の消えるやうな思ひがした。それは今まで人間を殺したれてゐた彼にも似合はしくなくらゐの驚き方だつた。

（あゝ、申譯のないことをした！ 輕卒に起きたりして、お念佛一聲で千人の人をお救ひなされるあのお上人様の尊いお念佛をお止め申してしまつたわい！）

然し、教阿彌はどうすることも出来ないで、そつとそのまゝまた臥床に横たはつてしまつた。

その後、また或る日、この日は教阿彌が相模の國まで旅立つことになつたので、法然上人の前に出て、最後のお願ひをした。

「いよく今日お暇を頂きます！ つきましては御法門の御奥義など承りたうございます」

上人はしばらく教阿彌の顔を見てゐられたが、やがてもの靜かに、
「念佛には別に奥義はない！ 念佛申す者が往生するのぢや……先夜、そなたはわしと只二人、念佛したではないか！ わしは知つてをつた！ 教阿彌よ、あれが本當の念佛ぢや！ 決定往生を願ふなら、人前や見榮の爲めに念佛してはならぬ！ 他人の物を盗む時には、他人に全く氣づかれぬやうに懸命なものぢや！ その通り念佛申すにも一心にしかと念佛せよ！」

教阿彌は、俄かに疊に額をつけて、ひれ伏してしまつた。この水をあびたやうな軋々と全身全靈に浸みわたるやうな教誨は、曾てないつとだつた。ありがたさに放心したまゝ首を垂れてゐた。泣けて泣けて、どうにも仕方がなかつた。

「教阿彌！ そなたは幼い娘を賣つたことを忘れまい？」

「はい！」と、ありのまゝの聲で、教阿彌が答へながら、僅かばかり、涙の顔をあげ、遠い昔を憶つた。

「そなたの娘に逢ふたことがある！ 然し、どこでといふことはないへぬ！ 只、そなたの娘も、その時立派に彌陀佛の御慈悲に救はれて居つた！ その後、儘に遊女からすつかり足を洗うて居る筈……そなたに、この話をすれば、きつと娘に逢ひたくならうと思ふが、逢ふな！ 逢はぬが慈悲ぢや！」

そこに教阿彌は、いよく造りものゝやうに跪いたまゝ泣きぬれて動かなかつた。



山椿咲く

吉田 絃二郎

門松も立てぬ春を二度迎へた。

一昨年の夏から頼んでゐる墓がなか／＼拂らないので、年の暮には二三度つけさまに多磨墓地まで出かけて行つた。その石屋の主人といふのが、すこぶる呑氣な男で、金をあげようといつても、金を受取りに來てくれぬので、つひこちらから金を持つて、わざ／＼遠い路を足をはこばねばならぬ。墓は別に急ぎもしないが、しかし無常迅速の人生だ、自分が生きてゐる間に墓のこと、一切のことはきちんとすまして置きたい。

鳥は本能的に巢を作る。人は相當の年齢に達すれば家を造るが、またやがて墓をも營むだけの心がけがなければならぬ。形の上の墓はともかく、せめて心の上の墓だけは支度しなければならぬまい。わたくしもつひ二三年前までは、墓の支度を忘れるとはなく忘れがちであつた。墓の支度は一面死ぬ

ための準備であると同時に、もつと端的に生きてゆくための準備である。

「わが一生吐き捨てたる言々句々辭世ならざるはなし」と唱破した芭蕉翁の俳諧は墓を支度したる人の藝術である。

いつも死を覺悟するといふ心はわたくしのやうな天涯孤獨の者にはさして困難なことではない。芭蕉翁の句に

九度起きても月の七つかな

といふのがあるが、現在のわたくしには夜毎くりかへされる經驗である。夜も更け、人も寢靜まつたところ、眼ざめては如何に生くべきか、如何に死すべきかについてのみ考へるのが夜毎の口癖になつてしまつた。一切の物をいかに處置しておくべきか。いかなる形式の遺書を認めて置くべきか。できるならば、靜かに、寂然として、しかも強く生き貫いて行きたい。

死ぬことはすこしも恐れないといふが、死ぬことはたしかに悲しい。寂しい。永劫の時を通じて二度と還ることのできぬ現世だと思へば墓前の一輪の山椿の花にも未練は残る。

しかし死はさまで恐ろしくはない。たゞ妻もなく、子もない自分としては、自分の亡き骸を人に世話していただくのが辛い。人にも見られぬ場所で死にたいと思ふが、凡夫のあさましさか、せめて骨だけは妻の傍に並べてやりたいと思ふ。



自分の死後のことまでいろいろと考へる必要はないといふ人もあらう。たゞ一切をあなたまかせにして生きて働けばいい。人の爲に苦しめばいいといふ人もあらう。たしかにさうである。西行法師も桃水和尚もわたくしたちに孤獨者の行くべき道を教へてくれた。わたくしも生きてゐるかぎりは何かをしなければならぬと思つては、自分の心に鞭打つて生きて行く。たゞしかし人間には一方佛のごとく深く悟りの一念があると同時に、他方悟り切れぬ弱心の惱みがある。昔の高僧たちですら臨終の床に涙を落してをられるではないか。

このころの花嫁たちは何うか知らぬが、昔わたくしの姉たちがいざ嫁入りをするといふ時には両親も泣き、當人も泣き、わたくしたちも泣いたものである。

死ぬることは未來世への嫁入りである。めでたいことである。しかし泣かずにはをれない。

未來世はありがたい。しかし現世もありがたい。

一切空と観ずるところに悟りもあらう。しかし一切假現の相そのものゝ上にこそ尊い人生があり、藝術があるのではないか。

悟るといふことは迷ひ深ければこそ生まれる。

悟るといふことは悲しみ深ければこそ生まれる。

今日の悟りは明日の悟りを意味しない。明日はまた明日の

悟りあり、明日の迷ひがあらう。迷悟亦一切空だ。

×

生のうれしく、ありがたく、尊ければこそ死も亦なつかしく、ありがたく、尊い。

死ぬことは平氣だといふのは嘘であらう。われわれは未だ死の世界を知らない、何といつても生に對する未練を切り離すことは容易でない。たゞ心の持ち方によつて死をさほど恐れなくなるまでのことである。

かりそめの旅、たゞ數日の旅に出るのさへもの寂しく思ふのが人情である。永劫の旅に出づることを思ふと涙も流すであらう。

たゞ悟るといふのは、悲しみは悲しみとして、靜かに運命の前に合掌するだけの心の落ちつきを持つことであらう。

一日生き延びれば一日深く孤獨の悲しみ、人を思ふ涙に胸を苦しめなければならぬが、これも恵まれたる一日であらう。

よろこびの一生をめぐまれて生まれ來た人もあらう。

かなしみの一生をめぐまれて生まれ來た人もあらう。

喜悲一如だ。喜悲皆空だと観ずれば生きてゆく力も湧いて来る。

病院へ行つて見ると十三年も十五年もベッドに横たはつてゐる氣の毒な人もある。

しかし半月そこそこで死に別れなければならなかつた妻のことを考へると、永い間病院に入つてゐる人の仕合せがうらやましくなる。世の中のことは考へ方一つである。

×

西行法師にもよくよくの悲しいことがあつたのであらう。

よくよく世の無常を觀するやうな出来事に胸を傷めたのであらう。で、なくては七十幾年の生涯を墨染の衣一枚に托するほどの大勇猛心はおこらなかつたであらう。でなくては、あの尊い一生も、なつかしい歌も人類に残されなかつたであらう。それを考へると自分の悲しみを粗末にしてはいけなと思ふ。一日でも長く生きて、天涯孤獨の人間の成就し得べき仕事だけは残して置きたいと思ふ。いつ死んでもいゝと思ふ心と、もつともつと生きて何かを遺して置きたいと思ふ心とが、このころのわたくしの胸の裡に在る。

死ぬることも生きることも、何かに仕事を遺すことも一切はあなたまかせである。たゞ世間には古往今來わたくしと同じやうな心の境地に棲み、憐んでゐる人がたくさんあるであらうそのやうな人々といつじよに悉皆成佛の願ひを持つといへば、すこし大袈裟であるが、幾分さういつた感じも湧いてゐる。もしわたくしがかつて善人であつたらそんな願ひも立てぬであらうが、せめて故人に對しての懺悔のつもりから、さういつた氣分も湧いて来る。

×

暮の三十日は亡くなつた妻の母の祥月命日であつたので、鐵仰會の川端師に晝すこし過ぎにお越しを願つて、御回向をしていただくことにした。ところが來客があつたり、生まれたびかりの仔犬の世話をしたりして讀經の時が遅くなり、夕刻川端師の御念佛がはじまつた。その御念佛のさなかに東京から使が來た。朝顔の花の咲くころから依頼して置いた南無阿彌陀佛の一軸を經師屋が持參したのであつた。大島徹水臺下の御染筆である。思はぬ折に思ひがけなく約半年振で突然届けられたわけである。母の追善供養のちやうど御念佛のさなかにとゞけられたといふことをいろいろに考へて見た。早速南無阿彌陀佛の一軸を床の間に懸けて春を迎へることにした。軸の前には青銅の香爐を供へ、脇に千兩と水仙を生けることにした。この青銅香爐は妻が最後の病床に就く三日前泉道雄師にいたゞいたものである。そして今年の元旦にはじめて牡蠣灰を入れて床の間に飾つたものである。香爐に灰を入れて間もなくこれも何の前觸れもなく池田立基師が御回向にお越し下されたので、直ちに青銅の香爐に初めて香を焚いて御軸についての不思議な因縁をお話した。池田師は元旦に於けるたゞお一人の御客さまであつた。偶然といへば偶然であるが、わたくしたちが想像してゐる以上に人生にはいろいろな因縁の相が現はれる。

俳壇

大田 早 勲 子



大阪市 谷 上 草 眠
妻と子の日向ぼつこに加はりぬ

評——誠に和かな光景である。微側と云ふよりは寧ろ小庭の方がふきはしく薄縁でも敷かれてゐて、其處に居るやうに思へる。妻と子の日向ぼつこは是れだけでも、ほい、えまじい光景なのに、其れに一枚主が加はつたのである。世に是程平和な家庭は、そう深山はあるまい。表現は如何にも平明で、然るに後あるものにしてゐる。此の句から「妻と子の何の話ぞ雨鮎 白民」と云ふのを思ひ出した。違つた意味での平和な空氣が漂ふてゐる。前句を動的とすれば後の句は靜的とも云ひ得やうか。

楊木縣 大 輪 云 海

冬月に照され風呂のランプかな

評——蒼白の光を放つ冬の月が風呂の窓から射し込んでゐる。窓硝子の内には小さな豆ランプが灯つてゐて、冬月の光に照れさせられ、自らを照らすのが一杯のやうに見える。折々吹いて来る隙間風に燈を揺はれんとして眠いては立ち直つてゐる光景が想像せられる。此の句は單なる寫生に終つてはゐない。深さがある。寫生句(情景句)には概して淺薄なものが多く、敘情句には概念的なものが多いためであるが、寫生句を淺薄に陥さないやうにする爲にはどうすればよいかと云ふに、私の先輩がこんな事を言つた。成る事物を詠はん

福壽草刀劍並ぶ店にかな

評——福壽草は平和を代表し、刀劍は動亂を代表してゐる。と斯う考へると極めて矛盾した不自然な取り合はせのやうではあるが、福に見る類の光景ではなく、嚴肅な中にも和かさのある年頭を表はし得て妙である。

福 島 齋 藤 舟

招集解除となりて大爐にうち對ふ

つはものとなる日の僧をたのしむ

滋 賀 重 野 ふ み 子

大廣間人をまぢめる寒さかな

東 京 三 野 輪 江 雪

むくく／＼と工場の煙朝寒し

宮 城 菅 原 仁 廣

島人も戦勝の初日をがみけり

京都 福島孝治郎
秋の月湖の眞中に映ゆるのみ

岐 阜 鑑 鏡 見 誠

空ゆけば淡路島山雪はれて

米 子 宮 本 白 土

あん餅を焼いてしみ／＼年守る

千 葉

戸をくれば身にしみてこし氷柱かな

香 川 日 向 法 圓

寒菊に破れし傘となりけり

關 西 上 杉 典 瑞

東洋平和に立ちたる戈に初日影

福 野 川 忍 汀 女

しみ／＼と墓前を掃きて菊植うる

大 阪 中 木 米 三

世渡りの拙さ思ふ冬曇り

大 阪 別 府 葉 子

中風の父と語るも夜寒かな

新 潟 西 巻 伯 東

街路樹のいのちの一葉多に入る

堺 笠 井 松 枝

初夢や父の手柄を眼のあたり

東 京 雅 恵

ありがたや息災にして難煮膳

小樽 中 村 茂 彰

揚げ舟の雪に影さす寒の月

下 關 關 野 公 孫

塗りたての浮標に冬の汐速く

山 口 長 岡 見 智

流れ着けり枯野の濱の埃木片

兵 庫 三 木 有 司

カナリヤのはれがましきも春

香 川 荒 木 武 智

初日さす兵士の胸も勝いくさ

楊 木 大 輪 云 海

餅草の萌えて堤や舟つくる

楊 木 萬 壽 云 海

ふはり／＼雪きて水の面しどかな

楊 木 大 輪 清

雪やんで田の面は廣し春包ふ

福 岡 三 浦 壽 子

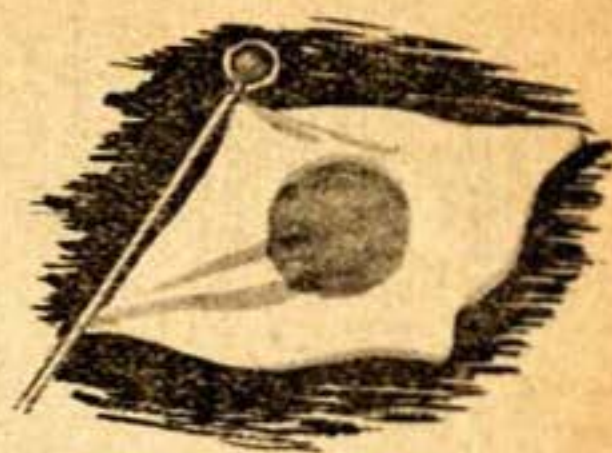
初詣清々しさは心まで

朝 鮮 蟹 江 八 年 官

雪風に追はれて峠くたりけり

投稿規定

官制はがきに一枚二句以内
とし「添土」編輯部併置係
あて送ること



想・隨・仰・信

輝かきいの生活せいくわつ

中野 尅子

今日は祭日で、戸毎に国旗が懸つてゐる。

古いのや、新しいのや。小さいのや、大きいのや。キレイのや、穢いのや。色々あるが、一軒残らず、皆、どの家にも国旗が出てゐる。

私は、そのハタ／＼とひらめく国旗を眺めてゐて、強く心を打たれた。

「国旗には、安いのも、高いのも、立派なもの、粗末なものもあるだらうが、而し、どの国旗にも、その一つ／＼に日本精神が躍つてゐる。眞赤な日の丸の上に、日本國家の理想が輝いてゐる——あの白地に赤く染めぬいた日の丸を見ていると、そのヒラヒラと動く度に

日本！

といふ強い意識が興らへれ。實に日の丸は日本の魂だ、生きた日本の姿だ！」と、ハッキリ感じた。

あの小さい旗が一つ／＼日本の全生命を代表してゐる。日本の血潮を、日本の意氣込みを、あの国旗の上に盛り、あの一枚の上に現はしてゐる。どの一流を見ても、皆、輝いてゐる。小なりと雖も小に非ず、實は「大日本」の全體を、立派に象徴してゐる。

□

あのように、私達は、どんな八十の乞食婆さんの一人でも、三歳の孤兒でも、今、日本の力によりて活かされてゐる「日本の婆さん」

だ。「日本の子供」だ。自分が生きてゐるのでなく、日本が生かして來たのだ。尊い、全日本の所有にかゝる「日本婆さん」だ。「日本の孤兒」だ。青年も「日本青年」だ。自分の勝手で、死んでも生きていゝといふような、一個の青年でなく、日本の全使命と全活躍とが約足づけられてゐる。國の寶、國の財、國の柱、國の發展の權化である。

古來徳川家康を東照權現さまとして尊んで來たが。たゞに徳川家康一人でなく。日本の人間は一人残らず、百姓、紙屑賣の一人に至るまで、皆、日本を護り、日本を發展せしめるための權化でない者があらうか。

此の商賣も、此の出勤も、自分の金儲けの爲めに、人をベテンにかけても儲けりやいゝ生計の爲めの稼業だなど、云ふのでなく、又どうしても斯うでも、少しでも上手に儲けた奴が勝たといふだけでなく、少くとも日本の繁榮の爲めに、日本が私にやらしてゐる、尊い仕事の一つ、働きの一分であると思はねばならぬ。

八百屋をやつても、呉服屋をやつても、荷車曳きをやつても、先生をやつても、お醫者さんをやつても、自動車の運轉士をやつても、身分の高低、収入の多少、社會的地位の上下はあるか知らんが、本當は、國家の盛衰、一進一退を雙肩に擔つてゐるものであります。

そして國家が發展するにも、衰微するにも、其單位をなしてゐる者は個人であり、我々自身であつたのです。だからどんな三文菓子屋でも國家的事業で、五億十億の大資本の經營事業と、その本質に於ては變らぬ。皆、大きく云へば國家を代表するものであり、國家を經理してゐる重要な一要素であります。

何も「俺だつて」と生意氣に威張る譯ではないが、確かに自分といふ者の一存在、一活動の意義がソコに在ると思ひます。自分の財産だつて、自分の一生だつて、單なる自分の私有ではなく、全日本に依つて支持され、全日本に依つて公有されてゐるものだから、自分の勝手氣儘だけで、どんなに費つてもいい、どんなに生かしても、殺してもいいと云ふ譯

のものではありません。

一錢の金と雖も、國家の背景、國家の働きなくしては、自分の懷中へ入つて來てゐる譯はないのだから、自分の財布であつて、自分の財布でなく、國家の財産、國家の中心からコレが費途され、國家的効用に役立つて行かんならぬ。生命も、産まれる時から國家が産んで呉れた。そして親や先生を通じて、國家が育て、呉れた。そして今も、警察や軍によつて國家が保護してゐて呉れるのだから、國家の爲めに御役に立て、行かんならぬのは當然の事です。

石や瓦、麥一粒でさへ、國家の爲であり、國家の用をなし、國家の爲めに、その全力を捧げ盡してゐるではありませんか。私達が、國家の中に死に、國家の爲めに盾になつて行かんならぬ位は、當り前です。

これを憶ふ時、どんなに微細なチブス菌、コレラ菌のような微菌一匹でも、或は、大は富士山、日本海のような巨體でも、皆、「日本の財産」であり、「日本の生命」であります。

「日本の原動力」「日本の彈丸」である。そして國家の一要素、國家の一員として働かねばならぬ。だから、自分を自重し、自愛して、自分の全能力を發揮し、自分を徒費し、徒死しててはならぬ——。

□

私達は、自分が國家の所生、國家の所有であると共に、天地の所生、天地の所有であり、又、如來の所生、如來の所有でありますことを知らねばなりません。

私達が生れて來たのは、不可思議、無量の緣の結晶からであります。

完全な一人の人間として、生れるのには、お母さんのお腹の中に在つた十ヶ月のみでなく、人類として發生して來た二十萬年の歴史、いや、その前の前の、地球の成生、宇宙の生起の起源よりの一切の活動、一切の進化が、此の瞬間の内に籠つてゐるのです。だから、私の生れたといふことゝ、ベスピヤスの噴火したといふことゝは、同じ重要性のある、全天地の活動によつて生じたものであり

ます。

釋尊が降誕せられた時に、その誕生の産聲として

「天上天下、唯我獨尊」

と叫ばれたと云ひますが、正か、いくらお釋阿闍世でも、赤ン坊の癪にそんな大人びた言葉を喋舌られたのではあるまいが、必ずや、これが「成道第一の自覺」「入信第一の叫」であつたでせう。成道とは人間の新しい生れ更りです、所謂「生誕」です。だから己が傳説的に從右胸生の時の産聲といふことに轉假されたのではあるまいか。そしてコレは、人間は誕生と共に、天上天下唯我獨尊の存在であることを、第一に自覺すべきだといふ大警鐘であると思ひます。

だから、コレは、釋尊一人の叫びでなく、全人類の叫びであり、人間に教へられる釋尊の叫びであつたと思ひます。そして釋尊と共に、全人類がコレを悟り、コレに生きること、釋尊が念願せられ、釋尊の成道に因つて、人間全體がコレを自覺附けられたのであります。

す。釋尊が總ての人間に先立つてコレを知り、總ての人々に代つてコレを成就し、永遠に不朽にコレを教へつゝあるのです。だから、コレは一切衆生界へ放たれた爆彈宣言であり、「人間黎明」への雄叫びであります。

そして、其の意味は、盡天盡地が、我れ一人を産むとて總懸りに懸つてゐる。天地の力を絞りぬいて、此の男一匹、女一匹を産んだのだといふ意味でせう。

假令、ビツコでも目カチでも、天地間に於て最愛の一人子だ、最大の存在だ、そして此の一人が良くなつて行くことを、全天地は念じ、全天地が祈つてゐる。太陽もこれが爲めに照り、大地もこれが爲めに支へ、春が來たり、秋が來るのも、此の一人子の爲めなればこそと、努め、働いてゐて呉れることを思ふ時、吾れ一人の悦びを感じざるを得ぬ。泥棒でも、悪人でも、現在、此の恵み、此の愛に浴してゐることには變りが無いぢやないか。そしてそれ程大きい恩恵と、使命とが封じ込められてゐることを思ふとき、自ら

戦き、自ら身震ひせざるを得ぬ。

だから、私が産れて來たのでない、私が生らされたのだ。私が生きてゐるのぢやない、私が活かされてゐるのです。故に「降誕」といふのです。

如來の世界より、如來の理想、如來の使命を以て生れて來てゐるのです、そして私の動く一舉一動は、その「如來の動き」、如來の生活でなければならぬ。

我國、華國の歴史は、天孫降臨に在るといふ。だから我々日本人は、神の世界より降り、神の世界より來たり、神の精神を實踐する神の子孫であります。天上天下唯我獨尊、これを古今に通じて不謬、これを中外に施して不悖る、至聖至公の大道を實行するのを以て生命とする國民であります。

だから、降誕、降臨の精神こそ、眞に活ける者の第一の信念でなければならぬ。

□

佛といふ方や、神といふ方が、私と離れてドコかに立つてゐられるのでない。

「私が——」生きてゐるといふことは、ココに「神」が生きてゐられる證據です。私が働いてゐるといふことは、「佛」がココに働いてゐらして下さる證據です。

佛なくしては私は無かつた。「私」があるといふことは、ココに現に佛在ます、確證であります。

天地無くして、私の有りようはない。天地が私であり、私が天地である。

如來が私であり私が「如住」「如去」しつゝあつたのです。念佛の行者、徳本上人が「徳本が佛になることは出来ぬが、佛が徳本になつて下さる——」

と云ふて、歎んでゐられた。何といふ意味深い言葉であらう。そして何といふ敬虔な、何といふ力強い、自信に充ちた言葉であらう。

私が佛になるのではないが、佛が常に、私になつてゐて下さる——そして、常に佛が私を、佛にして行つて下さる……

といふ大生活になりたい。即ち常に、自分の中から「釋尊の降臨」です。「天孫の降臨」

です。自分の内に法藏が生れ、其の法藏が常に本願を建てられ、不退に阿彌陀佛が誓願を行じたまふ——生活でありたい。

その時、敵に向つて、火を吹く機關銃を撃つことも出来る。渾身の力を奮つて、工場の湯氣の中にハンマーを振ふことも出来る。又蒼穹の下、肥桶を擔いて、一莖の苗草と共に

其の成長を樂しむことが出来る。

實に、高く天を仰いで神に感謝し、深く地に伏して、如來の慈恩に酬ひ奉らんと希望はざるものには不幸なる哉。常に自分の胸中に信火燃え、炬火よく前途を照らす輝きの生活でありたい。

撞球場の哲學

「私は百撞きますよ。百と云ふとこの球場

でも幾人もいませんが、また百以上撞くと

云ふのが容易じやありません。百位ひまで

は誰でも年期さへ積み行きますが、その

上は餘程の天分が必要ですね。ところがで

す。名人になると二千三千なんて云ふの

はざらです。百と二千三千と大した距りじ

やありませんか。自分じやこの球場で一人

前だと思つたつて、そんな人と較べたら

話になりません。人間も自分じや一人前

だと思つても、一番上の人を見たら、この

位の距りはあるんでせうな。

それに私などはキューの持ち方でこの人

はどの位ひ撞くか、直ぐ解りますが、それ

も百、二百位ひの人まで、それ以上にな

ると却つて撞き方が見たところぎこちなく

なつて来るから、まるで解らなくなつて來

ますね。大賢は愚に似たりとはこんところ

でせうな。」



話 童

銀の鈴と小猫

中山 義助
野水 昌子 畫

けい子ちゃんはお母さんから銀の鈴を一つ頂きました。

それはいつもお母さんが鉄に付けておいでになつたのですが、けい子ちゃんは、その鈴の音が、大へん気に入つて、ひまさへあると鉄をいちつてゐるの、お母さんは怪我でもされてはいけないと思つて、そんなに好きなものなら、大事な鈴なのですが、……と云つて下さいました。

『これは銀ですから大事にするんです』

よ。

『ほんとうの？』

『ええ、本當の銀ですとも。だから、こんなに良い音がするんですよ。』

けい子ちゃんは大きな目を一ぱいに開いてびつくり顔をしましたが、すぐにとつても嬉しさうな顔になつて、お母さんは本當に良いお母さんだと思ひました。

けい子ちゃんは直ぐに、これを帯に付けて頂きましたが、からだを動かす度に、その銀の鈴は可愛らしい音を立て、けい子ちゃんを有頂天にしてし

まふのです。

——その中に、けい子ちゃんにすばらしい考へが浮んだのです。

あのふみ子ちゃんとの三毛猫が、今度生んだ仔猫の一匹に、この鈴を付けてやつたら、どんなに可愛いだらう——あの仔猫の綿のやうに、柔い毛の中に、ほんとうの銀の鈴が隠れてゐて、ちやれる度にチリン／＼なる。けい子ちゃんが呼ぶたびに、糸まはりが轉るやうに、銀の鈴をならしながらかけて来る……。

けい子ちゃんはこの素敵な考へにま

たすつかり夢中になつてしまひました。

その翌日けい子ちゃんは、ふみ子ちゃんのところから三毛の子を一匹戴いてきました。

丁度お父さんもお母さんもお留守だつたので、女中の芳に手傳つて貰つてその鈴を赤いリボンに通して、その小猫の首に結はいてやりました。

小猫ははじめの中はおず／＼してなか／＼けい子ちゃんと遊びませんでした。が、芳と二人でぢやらしてゐる中に、すつかりなつてしまつて、けい子ちゃんが夢中で考へてゐたやうに、可愛い首を振りたてゝ、銀の鈴をチリン／＼ならして、一緒になつて遊ぶのです。花子と名前を付けてやりました。

『まあ、可愛いこと』

芳はさう云つて一人の大人と一人の子供と一匹の小猫は全く仲の良い友達



になりました。

三人が夢中で遊んでゐるところへ、

お父さんとお母さんが御用達からお歸りになりました。

お父さんはけい子ちゃんの抱へてゐる花子を見ると直ぐにむづかしい顔をしました。

『その猫はどうしたんだ。』

『ふみ子ちゃんところから頂いて來たの。』

『なに、貰つて來た！ 猫はいかん、猫は臭い、俺は猫は大嫌ひだ！』

お父さんはさ／＼いやさうな顔をして、吐き出すやうに云ひました。

『あなた！』とお母さんはたしなめるやうに云ふのです。『でも、切角貰つて來たものですし、……あら、昨日上げた鈴を付けて……可愛い猫じゃありませんか、飼ひませうよ。』

でもお父さんはそのにがい顔を一寸もゆるめずに、猫を見下しながら『いや、猫は駄目だ。臭い、毛が抜ける、俺はやり切れん。返しておいで、ね、けい子』と云ふのです。

けい子ちゃんはどうして良いか解らなくなりました。普段はやさしいお父さんが、この可愛い猫のどこが嫌ひで、こんな恐い顔をなさるのだらう。けい子ちゃんはまだ半分べそをかいてゐます。

『それじゃ仕方ありません。けい子、ほんとうに可愛い猫ですけど、お父さんが嫌ひだと仰しやるから返していらつしやいね。』

お母さんはやさしく云つて下さいました。

けい子はもうどうにも仕様がありません。今にも泣き出しさうな顔で、花子を抱いて、しよんぼり立上りました。

『あゝ、その鈴をとつておかなければ……』

とお母さんが、しよんぼり出て行くけい子ちゃんのうしろから注意しました。

『この鈴？』

とけい子ちゃんは半ばその顔をふり向けて、お母さんの顔をまじく見ました。

『でも、この鈴、もう、花子に上げてしまつたのよ。とり返しては可哀そうよ』と云ふのでした。

『でも、それはお前の鈴だろ、それは銀の良い鈴なんだから、とつておきなさい。』とお父さん。

『えゝ、そりやお母さまから頂いた大切な鈴よ、でも、花子にあげたのだから、花子のものよ、とつてしまつたら寂しがらわ』

とけい子ちゃんは、花子をそつと抱

きしめました。

この時お父さんとお母さんは、顔を見合せて、どちらからともなく、一緒に笑ひ出してしまひました。そしてお父さんはいつものやうな柔い聲で、

『けい子、その猫飼つてやるかな。』

『えッ、』

けい子ちゃんはまた大きな目をくりくさせて、びつくり顔をしました。

『うむ、飼つてやつてもいい。』

『本當？』

けい子ちゃんは飛上るやうに喜びました。

『でも、飼つたら、猫の世話は一切お前がしてやるんですよ。』

さう云つて、お父さんとお母さんはまた大きな笑ひ聲を立てました。

けい子ちゃんは、矢張り、お父さんは良い人だと思つて、とても嬉しくなりました。(をはり)



天 壽 命 定 體 驗

衆議院議員

望 月 圭 介

日清戦争の済んだ翌年の明治二十九年、僕は臺灣の臺中で悪性のマラリヤに罹り酷い目に逢つた。醫者から「いよ／＼いけない」と宣告の下つたのが六回、附いてゐる家族も親戚も友人たちも皆んなすつかり諦めて仕舞つた。

パリで一時賣り出した藤田嗣治と云ふ畫家の、今朝鮮にゐる父君が、そのころあちらで軍醫部長をしてゐて見て呉れ、「夜が明けるまで持つかどうか請合はれない」と云つたそうだが、それが不思議にも持ち耐へて死線を突破し、ついに全快した。周囲の人々も意外であつたが本人の僕自身がまさ／＼と此の不思議な奇蹟を體驗した譯だ。

天壽定命の佛説から云へば、壽命と病氣とは全く別もので、病氣の法は醫者で治るが壽命の方はどうにもならないと云ふことになる、僕も又この點を深く信じてゐる。と云ふからとて自ら身體

を粗末にしたり、又病氣を馬鹿にしたりするやうなことは決してない。風邪をひいたと思へば直ぐ醫者を呼んで見て貰ふ。衛生に注意したり、養生を等閑にしないことは身體に肥料をするやうなものだと心得てゐる。

明治三十一年、三十一歳で初めて郷里廣島から衆議院議員に當選し代議士生活を始めたが、そのとき三百人からあつた知人友人中現に残つてゐるのは僅かに十五人で、二百八十五人は、此の四十二年間に皆んな先へ逝つて仕舞つた。

無常迅速とは能くも道破されたものである。斯うした中に在つて兎も角生れ歳の第七回目の卯歳たる七十三歳の春を迎へ得ることを悦び、自祝せざるを得ない。これ一に何事もお任せ主義の他力本願の信仰に生きる功德と佛恩を報謝しまゐらする次第である。(松濤在龍文責)

筆隨
これぎりの心持

石井眞峯

私の恩師に「Y」といふ人があつた。學生時代よくお宅へ遊びに行つたが、歸りがけには必ず玄關まで送り出して「わざわざ、有難ふ、左様なら」と挨拶をされ甚だ恐縮をしたことが度々あつた。こちらから進んで御邪魔に出掛け、お願いごとがあつてお訪ねした場合でも先生はさういふのであつた。これは先生のあたゝかいお心の發露でほんとに美しいことだと思つた。さうかと思ふと暇乞をして玄關を出る、も一度戸を閉める時ふり返つて目禮をする居間へ戻る主人の後姿が見えるといふ場合も度々経験する。これは餘り氣持のよいものではない。成程先方は自分よりも年は上、地位も上であらうが、それにしても、ふところ手

をして挨拶をされたり、最後に目禮をしようとすると、その後姿が見えたりするのはいかにも情がなさすぎる。その人の心の中も察せられるやうで淋しい氣持になる。「今生これぎり」——さういふ氣持で人生萬事に當ることが出来たらもつと人生に味も出てくるだらう。「まだこの次もある」といつた氣持が私達の仕事をぞんざいにさせるのである。私は茶の湯のことを何も心得てゐないが、茶の湯の方ではこれを一期一會の心といふことはどなたも先刻御察知のことと思ふ。茶の湯の交會は一期一會といつて幾度同じ主客が交會しても今日の會に再びかへることが出来ないと思へば一世一代の會である、去るにより主人は萬事に

心を配り、粗末なきやう致し、客も亦主人の心づかひに感心すべきである。退散の時は主客とも餘情殘心を催し退去の挨拶も終れば客も露地を出づるに高聲で話さず、靜かにあとを見かへり乍ら出て行くと、主人も尙更のこと客の見えなくなるまで見送るのである——かう「茶道一會集」に出てゐるさうであるが誠にゆかしい心ではないか。客は靜かにあとを見かへる、主人も客の姿の見えなくなるまで見送る——何んとも云へない氣持だ。

古今を問はず一藝一道に秀でた人は皆この精神で事に當つたのである。辭世の句を求めた弟子に對して「きのふの發句は今日の辭世、今日の發句はあすの辭世、生涯云捨てし句々一句として辭世ならざるはなし」と答へた芭蕉の心も同じである。鯉珠禪師が「老僧世に住む七十三、度世四十四年、前後半生日々汝等に敗る所悉くこれ遺憾」といはれたのもそれである。「淨土」の讀者には申上げるまでもない、あの



お弟子法蓮房が宗祖法然上人に對して「古來の先德には皆遺跡がございます。しかるにあなた様には一つのお寺もありません、御入滅の後にはどちらを遺跡に致しませう」とたづねると上人は「私の遺跡は全國いづこにもある。何故かといふに念佛を廣めることは拙老一生の仕事であつた。だから念佛を修行する人のある所はどこでも私の遺跡であるからだ」とおさとしになられた。上人も日々を今生これぎりの心で御過こしになつたのである。そして念佛の聲する所が遺跡であるといふ燃える熱と力で法を説かれたからこそ短い間に念佛の法門が貴賤上下に廣まつたのだ。

すぐれた學者、宗教家、思想家さうした人の手紙を見ていつも感心するのは、初めから終まできちんと書いてあることだ。私の手紙などは最初は少し丁寧に書く、次第に亂れて來て最後の方はだらしないものになつて了ふ。これではいけないと思ひ乍ら惡筆と「これぎり」の心の不足から同じ不始

末を繰り返すことになるのである郵便局の窓口、停車場の出札所の窓口でも時々買つた切手や葉書、切符や釣銭を不親切に投げ與へられることがあるが、この人にも今生これぎり、又會ふ日はないであらうと思へば不親切な扱ひは出來ない筈だ。私の兩親は二人とも最近死んでしまつたが、つくづく親の有難さを思ひ、年老ひた親のくどくどしい注意これこそ特に「今生これぎり」の心で聴くべきである。ほんとに「さればとて石にふとも著せられず」である。その心持であれば親子の間は間ちがひはないのである。業務に従事する場合も同じであらう、その心あつてこそ仕事に精進が出來、張り切つた氣持で手を動かすことが出来るのである。昔の各工がすばらしい藝術品を残したのも皆その心で仕事に従事したからである。佛像を刻んで行く一鑿々々にも精神がこもつてゐた。さればこそ末の世に至るまで人の心を動かさずに置かないのである。張り切つた心と創造の喜びを持た

ずに仕事に従事したところで緻な仕事が出る筈がない。先年私はある刑務所で囚人の製作品即展覽會を開たことがある。氣の毒乍らこれはと思ふ品が一つもなかつた。どこか暗い彼等の心を反映してゐるやうで仕方がなかつた。その筈である。自由を奪はれ、罪に泣く心で仕事を強ひられどうして立派な藝術品が出來やう。自分から進んでやらう、飯も食はずに、いや、食ふことを忘れてやる仕事でなければ本當の仕事は出來るものでない。あの「肉づきの面」なども一つの漫談、一つの物語としてのみ捨て去ることは出來ないと私は思ふ。京橋三十間堀に住む面師源五郎は腕はよかつたが大酒飲でその上仕事を嫌つた。従つて彼の暮しは樂でなかつた。暮の廿八日、三年前の注文である般若の面を急ぎ彫り上げ一子源之助に持たせて觀世太夫の家へ届けさせる。時が十二月なので觀世太夫はさでは金が欲しくて持つて來たと思ひそのさもしい心で彫つた面など將軍の御前でつけ

て出られるものかと怒りの餘り源之助の目の前で割つてしまつた。そのことを源之助より聞いた父源五郎はさては自分の腕が落ちたかとなげいて自分の仕事場で愛用の鑿を用ひて死んでしまふ。源之助は父の敵討ちとばかりそれから廿年間修業の末出来上つたのが「肉つきの面」で、はからずも觀世太夫がその面をつけるとどうしてもとれない。無理にとれば肉がとれさうである。そこで源之助は二十年間の苦心を物語り、觀世太夫も心から廿年前の所業を詫びた所般若の面がボカリと取れたといふ。これこそ藝道に於ける「一期一會」である。俗間の物語として一笑に附す譯には行くまい。たとえ食ふものがなくても、仕事のために明日を待たず、今の今精進をする氣持が何よりも大切である。

念佛の行も同じことであらう。御傳のどこかにあつたと記憶するが、明日ありと思ふ心がいけない、今夜はねてまた明日と思ふても、今夜中に死なぬとは限らぬ。睡眠中死んだのでは念佛が申されない。極樂往生の機會も失ふことになる。信心のことは今日主義でなくてはいけない、急げ、急げと申されたのは蓮如上人であつたか。自分の父のことを申しては甚だ恐縮であるが、昨秋八十五歳を以て正念往生をした。日頃よく念佛を唱へた。すべてを感謝のうちに暮した。ほんとに床について動けなくなつて二ヶ月半であつたが一言も不平を言つたことがない。動けぬ體を助けて風呂に入れて貰ふと、「有難い、勿體ない、これでは佛さまのやうだ」と言つて喜んだ。この父は十年前から往生後の一切の準備を備へて置いた。西化用の袈裟、衣は勿論、位牌二本まで用意をして自分で文字も書いて置いた。それにつけて思ふのは師匠の大切なことである。父は稱瑞上人について得度をしたがこの師匠が立派な念佛行者であつた。その後十有三年の間行誡上人に常侍致したが、その感化の大きいのに驚く。老父は常

にこの二人の師匠のことを語つてゐた。「來年は來年はと暮れにけりで」ある。佛法と念佛には特に明日があつてはならぬ。急げ／＼である。「これぎりの心持」で念佛をはげみたい(十四、一、九)

女房は夫の禪の蚤を取つてやり失は女房の喰ひ残りをたべてやる——ソレが信仰といふものです。六つかしい事では無い。

やれぬのをやる人間があるのにやられるのをやらぬ人間がある。

嫌はれる人は、嫌つてゐるからだ。

運はドコにも在る。

賢すぎるから失敗する。

遊ぶが愉快か、働くが愉快か。

尅子

信 仰 相 談

…中村辨康擔當師…

【本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと。誌上匿名は可】

如來の願力と緣起・信仰と

自己陶醉・明らめる・其他

(前承)

(答)

かくて私達が如來様の御慈悲に氣がつき「南無阿彌陀佛」と如來の御名を呼び奉る時たとへ夫れが瞬間であつても「我の破れた」嬰兒の如き心境となつて如來様の大慈光の中に融合致します。直ちに私達の自覺に上らないかも知れませんが、それはこちらの受信機の感度が、いだけの事であつて、救ひの事實は調ゆる「父子相好」の姿を現じて居るのでございます。だから熱心になればなるだけ其感度は高められて段々自覺に上つて参ります。

す。その自覺を「無生忍」と云つて云へないこともないと思ひます。然し迷情の雲が覆つて居りますから容易に忍の狀態にならないのです。これで愈々命終と云ふやうな切迫つまつた時には、本當に感度が高くなつて如來の來迎をも感ずるやうになるのだと思ひます。次に「信仰は自己陶醉か何うか」と云ふ問題ですが、信仰が生活に顯はれずに居るならば、第三者が見て或はさう批評されるかも知れません。然し、信仰生活と云ふ具體的事實があり

實際に喜んで居るとすれば、批評の如何に拘らず嬉しい事であつて、それをしも尙ほ「自己陶醉」と云ふならば、おいしい物をたべて「おいしい」と思ひ、可笑しい時に「おかしい」と思ふことも一種の「自己陶醉」なのでございませう。そんな馬鹿なこととは思ひます。一體「信仰」を自己陶醉などと批評することは、本當の健全な信仰を知らないからです。健全な信仰である限り自己陶醉など云ふ酷評は當らないと思ひます。如來様の本願力は「無量壽光」となつて天地に満ちて居ります。だからこそ一切のものが向上を要求して居る譯です。土も木も蟲も獸も教へざるに皆な悉く無量壽光を望み無量壽を求めて居ります。それを或は冷たく云つて「宇宙の綜合意志」と稱する人もあるでせう。或は

「宇宙の進化性」と名付ける人もあるでせう。何と名付けても其人の勝手ですが、それをもつと人情味のある宗教的な見方からすればそれに依て其人の人格が高められ、其人の感情が豊かになつて行きますのを心から嬉しく有難く感ぜずに居られないでせう、この事實に對して何う云ふ理由から自己陶醉と云ふのでせうか。如來様のお慈悲なくして私達は本當に生きては行かないのです。一杯の水も一握りの土も皆な天地の御恵みです。人の力ではありません。天地の恩力です。單なる自然の力としては片付けられません。自然を通過して必然に現はれて居る恵みです。凡ては他力です。自分の力が何處にあるのでせう。私の身體、私の心、一つとして頂いたものでないものはありません。その事實を素直に如來の賜

信 仰 相 談

物と受取り如来様の願力と氣付きました時、其願力は直ちに私達の上に増上縁力となつて強く働き、彼此和合する爲に、そこに救はれると云ふ感情がハツキリ自覺に上つて参ります。然しそれは「得る」とか「與へられる」とかの所得の問題ではなく生命の不安感がなくなつて絶對安立が出来るのですから、喜びもあとから附隨的に感ぜられて参ります。

「花の散るのも自然のまゝだ」と感ずること、それも因縁の然らしむるところ、元より疑ふ餘地はありませんが、自然の推移のまゝに放擲して置けない人間感情は、苦を脱却し迷ひを離脱して本當の喜び本當の明るさに到達したいものとの望みを起さずには居られません。本當の喜びは涅槃であり本當の明るさは菩提でありますから、聖道家

も色々修養したいと心がけるのですが、淨土門の信仰に於いても「不斷煩惱得涅槃」と云ふ言葉があり、阿彌陀經などにも「阿耨多羅三藐菩提を退轉せざることを得」などとも云つて居りますやうに、それが目的として望まれて居ります。聖道難行に堪えられない凡夫として、自分の力では及びもつかないから、如来様の大きな願力に引かれて淨土に往生し「無生の生」を得て菩提涅槃の妙集に到らせて頂くのであります。

また「諦める」と云ふことも明らかにすること、即ち縁起の理に明らかになつたことで、隨て消極的な意味では忍従と云ふことも云へませう。だが積極的には其道理に忍従するからこそ出来るだけ「縁」を調へて、少しでも迷と苦と惡とから離れて明と樂と善とに進まね

ばならぬ譯です。それがまた眞理に従つて居る人でもありません。然し縁は多種多様であつて其中の遠縁逆縁を悉く順縁に調へて行くことは困難でもあり、また極めて複雑して居りますから、其糸口さへ分らないのでもありますゆへ、其諸縁を引きずつて行ける強力な如来様と云ふ増上縁に結びつく「信仰」こそ最も易行であり勝行である譯です。理に現はれつゝある結果に對しては「忍」を以て臨み未だ現はれざるものに對しては縁起の理に「從」つて佛願の強縁を仰ぎつゝ、轉重輕受はもとより最後の目的にゴールインして行くのです。だから眞實に忍従する「信仰」に、歡喜のあるのは當然であります。云ひたりませんが餘り長くなりましたから此邊で擱筆させて頂きます。

陸海軍慰問雜誌「淨土」

寄附者芳名(敬稱略)
(十二月一日ヨリ一月十日マデ)

一	西宮市	某	女
十一	東京市小石川區表町傳道院	鈴木俊美	
一	山内	川波	民
一	茨城縣多賀郡芳野目農園	伊介	
一	山口縣豐浦郡津田村	藤井	伊介
一	芝區西久保巴町八一	稻穂	源次
一	東京市普通宗學院二學年有志		
五十	大阪市教區教務所轄軍部		
一	和歌山縣日高郡和田村	清	廣
一	千葉縣大多喜町新町	大久保	治郎
一	靜岡縣富士郡原田村清岩寺	谷田	保道
一	養根市來迎寺	北川	順學
一	江戸川區西瑞江町四ノ十ノ	内山	けい
一	京橋區横町二ノ一	兒玉	義雄
一	滋賀縣神崎町旭村正福寺	中西	清道
二	新義洲旭町一	南	石松
一	北海道久遠郡久遠村	長坂	平作
一	京都府喜多田原村	山本	貞隆
一	青森縣東津輕郡平館村	丸尾	傳山
一	大阪普通宗學院生徒一門	弓削	トヲ
四十二	廣島市	柳	亮
一	福島縣須川町	安藤	信三
一	東京市普通宗學院宿願	田	マサ
一	愛知縣津島町	脇田	大
一	滿洲撫順小縣屯	津野	三
一	桑名市內堀	青木	桂山
三十六	東京市普通宗學院今戸町	關	一

信 仰 相 談

觀相と念佛

(問)

再度御手紙を申入れ恐縮の至りに御座候。私は自負心ながら三心具足の念佛行者と自信致して居り候が日課の折、西方無影彌陀空像を不調ながら偏思觀を有し候。但し自他力觀念では御座なく候。唯だ何となく佛ましますとの感じに御座候。此病義、一枚起請文の本願に洩れ候や否や御教導願上候。

(答)

(上總・大多喜・竹堂老) 如來様が何う云ふ御姿であるかは凡夫の計り知るところではありません。理論的には「真空妙有」の相(無相の相)とも申しますし、また具體的には觀經の第九眞身觀にあるやうに佛身は「六十萬億那由陀恒河沙由旬」で御眼は「四

大海水」の如く白毫相は須彌山を五つ集めた如く等々と云つて居りますから、是れ亦想像の及ばないものであります。

御尋ねの「西方無影彌陀空像の偏思觀」と云ふことが何う意味のものかよく判りませんが批判の限りでないと存じますが無影とか空とか云ふ言葉から判斷すると、空の考へ方が勝つて居りはしませんでせうか。單有が偏有である如く單空も偏空であつて偏つて居ると思ひます。然し御手紙の「唯だ何となく佛まします」の感じは結構だと存じます。佛ましますと感ぜられる其佛様に一心に南無せらるゝ事は正しい事でそれだけで結構だと思ひます。だからそれを思想上の言葉に直さないで「無影」

だの「空像」だのと御考へにならぬ方がよろしいと存じます。強いてお思ひになるならば空に伴ふ妙有、妙有に伴ふ空として考へられては如何ですか。然しそんなことよりも偏へに「如來様のお慈悲」がシミジミと味はれるやう一心に御念佛な

別時念佛の場所は

(問)

私は先年來信仰の問題で入信せんものと日夜煩悶をして居ります。大阪にて何處か眞實に道を求めん爲め別時念佛して居る所がありませんか。私は宗旨が違ふものですか。其方面の交際がありません。何處かお知らせ下さいませ。

(答)

(大阪・西成・TN生) 信仰を得る爲に別時念佛する事に誠によろしき事に候。また信仰を増進す

さるならば、やがて御自分で納得の行く境地が開けて参りませう。何れにせよ大變結構なことです。此上とも益々信仰に御精進なさいますやう願ひすると共に御心境に對し御隨喜申し上げます。

るにも必要のことにて候。法然上人も「時々別時をなせ」とすゝめ居られ候。御地方に講所(講堂)に有之事と存じ候。淨土宗の寺にてお問合せなされては如何に候哉。別けても大阪市東區小橋寺町成道寺様をお訪ねになればよく判ることと存じ候。

貞恭婦人會例會

二月四日午後一時ヨリ

芝公園明照會館樓上ニテ

淨き友の會だより

◇例會だより◇

本郷白山上橋本女史方の「友の會」の集ひはこゝ數回來全く宗教的な深みを増し、講話後の念佛も回毎に白熱化して來てゐる。中村先生の講義も、ぐん／＼會員の心を内に深く惹きつけ、宗教の眞の相にと直面さして下さるやうだ。來年からは、別掲の如く般若心經によつて、佛教の眞諦から淨土教を味ひかへして頂ける。きつと從來のどんな心經講義も企て及ばなかつた味讀が、先生の心泉から汲み分けられることであらう。求道の士の一層廣い参加を御願ひしたい。尙ほ今春第一回には親睦懇和の集ひを行ひ別項記事の如く盛會を極めた。さて

第七回淨き友の會は、十一月十三日夜、廿八名の參集を得て、六時半より九時

…信仰座談…

「淨き友の會」の座談の内容を左に抜書して見ます。

○南無阿彌陀佛の意味は？◇之は先月にもあつた。歸命即ちどうぞと彌陀に頼ることである。阿彌陀は無量で無量と名づくる佛よと念ずる心である。無量は特に無量壽(生命)、無量光(智慧)で、永遠の生命と無限の向上とを顯ふ心である。一切の生物には皆此の心無きは無い。此の心が眞に宗教的に轉じた時に念佛となる。それが信機信法とて、我身の愚惡罪業の深さに徹し佛の救ひの尊さに感泣する時が、心底から念佛の申せる時でありませう。◇佛の四十八願を以て往生又は成佛の四十八の條件と説いた人がありましたか？○言葉ではなく、本願の不可思議さに徹したいも

のです。◇私は永らく「某誌」の愛好者で、信仰の眼を開いては頂けたが、段々理窟が分つてくると反つて信仰が薄れて了つた。今日のお話で始めて意を得た心地がします。○理窟負けと申しませうか、理窟の上、觀念の上でなく、それを超克せねばなりません。一體信仰の進みは直線的ではなく螺旋形、波状形で浮沈があるものだが、全體的には向上してゐるのです。遂に信不退の境地まで行きつきたいものです。昔から口傳なくして信仰の書を讀むなどか言ひます。自分の小さい理窟でこね廻すなどいふのでせう。唯少しでも自分をよくする肥料として書を讀み話を聞いてゆきたいものです。佛教では聞思修の三惠と申し、始めは聞いて了解し(聞惠)それを思想感情の上に味ひ(思惠)更に生活の上に移した時(修惠)が、本當の智慧だと申します。○又、信の道程として、解信・證信・仰信の三が立てられてゐます。理智丈の解信は理智で破れると理窟負けになり、自身一個の體感のみ信ずる證信も小さい。理窟も體感も一小

半まで、念佛十五分を交へて講話及び座談に時を過した。講話は「四修」に就てで、佛教の修行の方軌に多く四修を立てる中、善導和尚の立てられた、三心五念の行を進め策勵すべき方法たる、恭敬修、無餘修、無間修、長時修の四種につき、敬虔な心持で専心に小止みなく何時までも、如來を仰ぎ慕ひゆく信仰生活を深めゆくならば、そこに「三緣」(親、近、増上)なる如來の御力の御加護、御導きを感じ、益々向上の生活の歡びを覺えるであらうことを説かれた。座談は主として珠數について悉く意味、種類、取扱をば話されたが、これは既出の信仰相談欄に悉しいのでそれを参照せられたい。

第八回淨き友の會 十一月二十日

先生の講話は「指方立相」に就てで、先年新聞紙上に問題となつた事例であり、先生はその當時教學部長として事に當つただけに話も熱火する想ひがあつた。我等は凡て指方立相の中に住ひ生きてゐる。指方立相なき生活相はない。生活の目途を立てるに導ひそれに向つて活動すべきである。

部分に過ぎぬ、それを超克して不動の信仰を成就するやうにされたいものですネ。○中には、念佛中に腹が立つのは信仰ぢやないのではないかと悩む。或は念佛して喜ぶのは自己陶醉ではないかと苦しむ。後の京都の方からも聞いて來られた點ですし、第四回の座談會でも出たこと(栗山瀧道氏)ですが、悲痛なこととは信じますが、甘い物を食して甘いと思ふのは自己陶醉ではない筈です、理窟に負けて素直に信受する姿が無くてはならない。要は少しでも信仰に依る生活淨化があればよいのです。生活の滋養がとれればよい。腹の立つとき益々念佛し、歡喜の念強きとき益々念佛してゆく人でありたい。素直に喜び、人情を感じる人で欲しい。人の親切も何か現露があるだらうなどと素直に受取れぬ人は不幸です。私は今朝或る講演會に参り、話を聞き乍ら唯だ涙を流して念佛する婦人の姿を見ましたが、實に貴いと思ひました。○情の勝つた人はそれ丈で入信出來るが、近代人は智に秀れてるから情丈では入り得ない。

然し知情意は平行すべきでせう。ただ理窟の勝つる人は理窟で分つても信まで來難いものです。智あつて而も理窟の要らないやうな位地迄高められたいものです。佛教で説く所謂無學位がそれです。◇或る人々の講演を聞く、釋迦何者ぞといふ調子ですが? ○心驕れる者であつてはならない、これは自己を深く掘り下げ反省する時、汲々そう思ひます。口筆に添つた生方が眞に出來てるかを想ふ時、生死の凡夫とは申せ、眞に充實して生きる相は少く死んだ姿が多い。死んでる許りでなく罪惡に塗れた輪廻流轉の生活です。古い泥製の佛像の靴が壞れたら中に外部からは見えね足の指爪まで造られてたといふ。大英博物館に一無名青年の生命に代へた作品に行きずりの人々も感ずるといふ。眞に生命をこめて生きる姿が尊い。我々は尊い先人の生き方を眞に尊敬する氣持で生きたいものです。

淨き友會員の心境

次にこの會の常連といつた方々はどんな人

單に我々は衣食住に於て生きる丈であつてはならぬ。此の三つを更に高く意義あらしめねばならぬ。阿彌陀佛の指方立相は、實に我々の歸依すべき處を知らしめ、眞實の生活の依據を明かにせられしものである。西方十萬億土と云ひ身相六十萬億那由多恒河沙由旬といふ、此の意味は地理的數學的のものでなくともより深い宗教的意義のものでなくてはならぬ。要は、地獄一定棲處なる我等、十惡五逆の淺間しき我等、生死煩惱の海に隱沒流轉する我等の、救はるの道を指示されたものである。本願念佛の道に依てかの佛に頼るとき佛の慈悲、佛の救ひの感ぜられること、それが來迎のあり、その時、我等の生活は歩一歩佛國土の中に攝取され、佛子と生れかはり得るのである。我等は阿彌陀佛の諸方立相に信順する處、生活の安立、人生の意義を始めて徹し得る。念佛の信仰確立が眞の指方立相の感得なのである。云々、

講話の後十五分の念佛の新たな感激！そして座談に時立つを忘るるのであつた。

か。記事中の人の外には、王子原田美之助、小石川鳴海要吉、宮良正備、吉澄隨彦、戸部ちか江、水野すゞ子、本郷壽淨信、板倉るい子、牛込澤幸江、龜町石川巳之助、京橋區綾部華子、中野溝口よし子、澁谷佐藤洋、品川尾崎傳次郎、芝遠藤直司、大森原田筆子、蒲田江崎光好、神田吉田耕作、向島青木正二郎等の諸氏、此の外荏原升水かね子、鶴見奥平昌壽、千住鈴木良全、新井嘉門、淺草朝倉馨、福岡輝氏等の熱信者の姿も再々見えられ、岡部彦次郎氏が態々取手から來られたのも静岡瀧口氏と共に大きい刺戟であつた。司會千葉寛定氏の萬障を繰合さるゝ姿も一同の感激である。

佐藤洋氏。十萬の億土にいますみ佛も身近かに覺ゆ念佛すれば

石川己之助氏。富士山の麓に居乍らお山を知らぬ人もあります。富士を説くに麓の景色途中の何合目かの景色、山頂の景色、人に依て區々であります。私は丁度一ヶ年の愛讀者

信仰坐談會案内 (來聴歡迎)

日時 二月十二日(第一日曜)午後六時ヨリ

二月廿六日(第四日曜)午後六時ヨリ

場所 本郷區東片町七八美容大學院(市電白山上下車)

橋本樂榮方(電話小石川四九七六)

講話 磐若心經講義

講師 中村辨康先生

で今回此の會にて中村先生の指導を受け、麓に住み乍ら靈山を知らぬ人の如く五十年否六十年の人生を無駄にする處であつたのを、かうして信仰に入れて頂き且つ一合より二合目三合目と次第に手を取つて導いて頂ける喜びを込めて感謝してゐます。

友の會新年初會

「淨き友の會」新年初會は一月十五日小石川傳通會館で會員六十餘名參會して盛大に催された。鐵仰會主事佐藤賢順師、會主橋本樂榮女史の挨拶に始り、中村辨康師の磐若心經講義の平易明快な講義に傾聴して、食事後第二部橋本氏令嬢の獨唱、舞踊のほか會員の飛入餘興福引などあつて和氣暖々裡閉會した。

金見仰運動ニユース

良忠上人の御遺跡に

本會支部を結成

會員三百餘で盛大な發會式

最近の鐵佛會の信仰運動は各支部とも次第に活氣を加へて來て各支部の念佛會信仰座談會等活潑に行はれてゐるが今度横濱市鶴見區矢向町良忠寺でも開山三祖記主禪師、良忠上人の御命日十二月六日を卜して本會支部を結成（支部長森本祐顯師）三百餘の參會者を集めて、華々しい發會式を舉げた。本部からは中村辨康、佐藤賢順、吉水智承、川端祐輔の諸氏が出講し聴衆に多大の感銘を與へた、尙今後毎月六日に引續き例會を開き淨土教義の宣揚に努めることとな

つた。

本部だより

★千葉西行寺支部長島野貞祥師の御舍弟貞俊師はさきに徳安方面の戦場で名譽の戦死を遂げられたが、最近御遺骨が凱旋本葬を執行されることになったので、本部からも多數參列哀悼の意を表した。

★中支某方面に轉戦中の本部組織部員辻重光少尉の消息は久しく絶えてゐたが最近眞野正順師宛に元氣なたよりをよせて來た。眞野正順師が本誌にその御健筆を絶つて以來久しくなるが最近では御病狀も益々快方に向はれてゐる。本部員一同御快癒の近からんことを祈つてゐる。

雜誌淨土を贈呈して

法蓮を家庭の中へ

芝・妙定院の新教化法

東京芝公園妙定院住職松濤在龍師は兼ねてより寺院の存在は教化機關としてこそ始めて意義あるものとの信念を有し種々活動を續けられて來たが、今回傳道文書としての雜誌「淨土」の重要性に着目されて今春一月より同寺檀信徒の

方々に本誌を贈呈し淨土宗の教義を各家庭にまで擴げられることゝなつた。なほ同師は檀信徒の修養座談會等に同寺の座敷を無料で開放し茶菓の招待もするとのことである。

渡中將の告別式

先般名譽の戦病死を遂げられた陸軍中將渡久雄部隊長は本會理事眞野正順師の兄上に當られ、本誌にも稿を寄せられたことのある方。去る十四日陸軍諸星將出迎への下に御遺骨東京驛着、来る廿五日増上寺に大島大僧正台下親修告別式が厳修される、謹んで哀悼の意を表する次第である。

良忠寺支部例會

舊臘十二月六日發會式を舉げた横濱市鶴見區良忠寺支部例會は、一月六日午後六時半から催されて佐藤賢順氏の「現代に生きる法然上人」の第一講を聞いた。會衆は五十名程であつたが、荏原中學校長加藤三郎氏其他多數職員、矢向小學校職員等熱心に傾聴し、講演後興味ある座談を交へた。なほ今後の例會は毎月六日六時より開催の筈同地方の會員は振つて御参加下さい。



戦死した一人子の消息 郁芳随潤

讀者、是非次に出した手紙を讀んで下さ
い。わづかに數通の短文で、而も夫れは極く
單純なものであります。

此の手紙の主はと申しますと、江州の貧し
い農家の一人子であります。家には、早く良
人に死に別れた四十五の母と七十の坂をとつ
くの昔に越した老婆二人とがあります。

其一人は祖母で、何時も持病の爲め床に
就き勝ちの人で、今一人は祖父の妹で幼い
時から足の悪い耳の遠い不自由な人でありま
す。

其上此家には財産どては無いのだから、ホ
ントに貧しい氣の毒な家庭であります。唯だ
一人此母が、幸にも至つて丈夫で、母朝早
くから夜晩くまで、小作百姓と其閑々に野菜
賣りをして、一生懸命働いて、未だ頑はない
ものだつた此の子を、女の手で小學校から兵
隊へと、育て上げて來ましたのであります。
従つて此母の此子に對する愛着は、人一倍

強いものがあります。先に滿洲に此子（周八
郎）が守備に行つた時も、今亦退營半歳なら
ずして支那事變に出征する時にも、よく云つ
たものです。『周八よ、お上の御奉公だ。立派
に働いて呉れ。然し決して無駄な事に命を捨
てるのでないぞ。不養生から病氣にかゝる
でないぞ。若し敵彈のため重傷を受けて
も、自暴自棄になつてくれるでないぞ。たと
ひ兩手兩足が無くなつて、連摩のやうになつ
ても、命があれば歸つてくれ。母は汝を大事
に世話するよ。母は汝がどんな片輪になつて
戻つてくなくても、此母は喜ぶぞ。身體を粗末
にするでないぞ。』と懇々吾心根を告げて居つ
たのです。

でも彼周八郎は、元氣に溢れて小柄なガツ
チリした勇ましい軍人として、母の此愚痴を
叱り乍ら、赤だすきをかけて、人の波、旗の
波に送られて出て行つたものであります。
私の所へも度々、今日も亦不思議に命長ら

へて……』と書き出した手紙をくれるのでし
た。兼ねて「斷然戦死だ。」と云つたやうに、
十分な覺悟をきめて居つた。君國のために、
吾々の爲めに戦つて居つてくれたのでありま
す。

彼は元より之と云ふ教育のある身ではあり
ませんが、純朴な眞面目な而も愛くるしい姿
と心の持ち主で、何時も元氣一溢にやる男で
した。

だから、早くから劍道に秀で、教練に優れ、
同輩を抜んで、今次には伍長に昇進して出
征したものであります。

始めは北支の沼澤に進撃を續け、後には南
京へと急追撃をなし、昨年に入つては中支の
殘敵掃蕩から徐州戦に出で、今次は武漢三鎮
攻略に榮ある 東久通宮殿下の御指揮の下に
立つたのであります。

夫れが遂に九月十一日戦死したのでありま
す。

× × ×
愈々今夜十一時出陣です。○○地方の敵は
相當に多く、且つ堅固な陣地を構築して居る
さうです。皆悲壯な覺悟で居ります。自分も

分隊長として隊員十四名の生命を預る身、むざ／＼と死ねないと考えて居りますが……。
唯今天津で、其出動準備中です。後二時間で〇〇へ夜行軍です。

母 上 様

北支にて 周 八 郎

其後、皆様お變りもありませんか。

大阪出帆以來始めて落着いた滞在です。塘沽上陸以來第一線ばかりで、一同喜んで居ります。吾々は京漢線と津浦線との中間を南進して居りました。〇〇河の沿岸をドンドン上流へ急迫撃したが、到る處で支那軍は、堤防を決潰して置いたので、何處でも一面の泥海となり、水面から高粱が頭だけ出して居ると云ふ光景です。こんな難路を毎日行進し續けて居るのですが、未だ足一つ痛めず至極丈夫で居ります。之れも全く神佛のお蔭だと深く感謝して居ります。

戦間に於ては、先づ献縣を初陣に小範鎮事晋と云ふ順序でした。中でも小範鎮の戦闘には、約五時間ばかり敵弾集中の下で、沼澤の中に伏して身體を泥に沈めかくして居りま

した。膝を没する深い沼澤を横断する最中、俄然敵の猛射を受け、どうすることも出来なかつたのでした。之れがため、此時中嶋大尉以下〇〇餘名の死傷者を出したのでした。

今此邊の支那部落は、俄か作りの日章旗を各戸に掲げ、土民は何れも日本軍を非常に歓迎してくれます。

吾々は、北支の戦も一段落ついて、此處河北省の南端寧晋に第二の作戦準備の爲め滞在して居ります。

少しく軍務に餘裕が出来ると、靜に故郷のことが思ひ出られます。郷里では秋の收穫に忙しいことだらう。家にはお



婆さんが臥んで居られるだらう。母上は一人であの廣い田を刈つて居られるのか知らん。男手も無い儘に、朝早くから夜おそくまで、一人で働いて居られてはと、お身體を案じて居ります。いろ／＼と故郷のことが冥想されます。

母上、どうか御身體を大切にして下さい。

又次の便りを樂みに、待つて居て下さい。

母上さま

(前略) 中支戦線に参加以來、相變らず第一線ばかりです。中支の敵は北支と違つて、蒋介石直系の正規軍で、随分手強く頑固に抵抗しました。でも吾々皇軍は攻撃前進で敵を急迫撃し時々五十米位迄接近しました。

吾が大隊も、〇〇地方より此の迫撃隊に加はり、南京に至るまで長い間迫撃で、陣地を占領しても直ぐ迫撃で休む暇なき駄足でした。私も今度こそは／＼と、幾回も覺悟を決めて居りましたが、御蔭で未だ一創も受けずにすみしました。是も皆、皆様の御蔭と神佛の冥護によるものと喜んで居ります。あゝ思へば、幾多の戦闘に護國の人柱となつた戦友達

よ。南京陥落、萬歳、萬歳と唱へた涙の中に感慨無量だ。

吾が分隊でも、一人、胸を打たれ、野戦病院に入つて居る。然し、命には別狀ないとの事で、一寸安心であるが。

今南京を離ること約七里の地點に滞在致して居ります。戦闘のことを思へば、此頃は全く樂な日です。

此手紙が着く頃には、内地では正月も過ぎるであるが、異國の空より新年の多幸を祈ります。では皆々様御自愛下さい。

五月九日出の小包本日受取りました。御忙しい中を度々御送附下さいまして、誠に有難う御座います。お心盡しの品々一つ一つに何と御禮を申してよいやら。

今度の戦場(徐州戦)に出てから三ヶ月。少しばかり持つて居つた日用品等は、トツクの昔に無くなり、今は戦場俄作りのフンドシ汗フキ等と云ふ折柄種々送つて頂きましたので、地獄で佛に遭つたやうで、餘りの嬉しさに、涙がこぼれました。厚く御禮申し上げます。

然し、是れからは御心配下さるな。かうして落着いた生活をすれば、隊から支給されるだけで何不自由なく出来ます。三ヶ月餘りも金の要らぬ戦場を駆け廻はつて居つたので、月十四圓三十錢頂く俸給を、今手元に積んで持つて居ります。今度送金が出来るやうになれば、お送り致します。

母上様

部隊の警備地に居た時の寫眞を御送りします。何れも之れも皆元氣な顔でせう。之れが支那兵を懲らしめる強い勇士のお揃です。何と頼もしいではありませんか。此の中に僕も交つて居ります。元氣な顔を見てやつて下さい。

毎日暑い日が續いて居ります。そして蟬のジイジイと鳴く聲を聞くにつけ、内地の夏を思ひ出して居ります。内地に於ても、さぞ暑い事でせう。祖母さん達は如何ですか。又何時もの持病が出て居るかとお心配して居ります。どうか呉々もお身體を無理なさらないで下さい。

楽しい日のあることを信じて御自重下さい。

母 上 様

中支の空にも、涼しい風が吹くやうになりました。

皆様元氣に働んで居て下さる事と存じます。私も御蔭で相變らず頑健です。御安心下さい。

先月(八月)中旬頃より〇〇方面の攻撃に行動中です。朝夕は涼しくても、日中になれば百度以上に昇るので行軍も又骨です。

先日金五拾圓送金致しました。五月〇〇會戦以後第一戦ばかりで、お金も不要です。

どうか、祖母様初め御一同に、おいしい物の一つも買つて、楽しい日の来るのを待つて居て下さい。又暫くは便りも出来ません事と思ひますから。

十分お身體を大切に。



二 伸

過日、戦友安井辰巳君が戦死したので、悔状は出しておきましたが、香儀を忘れましたから、此の五十圓の中から金五圓を包んで、小生代理として、お悔みに行つて下さい、所は……郡……村岡本です。では遠路御苦勞さまでですが、よろしく御願ひ致します。

母 上 様

× × ×

私は御令息の小隊長として、今次作戦基地出發以來一年有餘、苦樂を共にして〇〇攻撃の最後の抵抗線と云はれる大別山脈の山中までやつて來た者です。其生死を共にした私が、陣中よりかゝるお便りを差上げねばならぬ身の、如何程……かを御推量下さい。子を持つ親の身を思ふ時、而も親一人子一人の貴女の身を思ふと、どうしてどうして私がかゝる御便を差上げ得ませう。

然し早や、原隊より御通知だけはあつた事と思ひまして、一刻も早く、勇敢にして沈着、部下分隊を掌握すること他に抜きんじて居た御令息の、當時の状況を御知らせして、御慰みの一つにもと思ひまして、やつと思ひ切

り、お便りさせて頂くことに致しました。

夫れは忘れも致しません。九月十一日午前三時晴天でした。葉家集西方官塘の第一線部隊と交代のため待機、露したたる官塘東方の山谷に、其儘の服裝にて、一時の暇眠をとらんとする間も、間斷なき敵彈盛んに頭上を飛來するやうでした。何と云つても敵は、自然の堅陣たる大別山脈を最後の抵抗線として、頑張つた爲め、敵銃砲彈の飛來する事は、實に雨霰のやうでした。然し勇敢なる學が兵士は之を物ともせず、終に同日午後〇時三十分第一線となり、〇〇師團〇中隊と交代し、一ヶ中隊の戦闘正面を一ヶ小隊で擔當致しました。

特に小隊の交代した處は、何處の小隊より一番先に出て居る高地だつた爲め、又格別でした。爲めに小隊左右の敵情監視は重且大なるものだつたのです。同日午後二十五分、貴家御令息の指揮する分隊は、小隊の左正面の陣地を占領し、同地點に頑張つて自ら敵情監視中、斜右より飛來せし敵彈の爲めに胸部重傷を負ひ、分隊の兵は云ふに及ばず、小隊全員の懇切なる看護に見守られ、丁重な



寫眞は一月十五日「淨き友の會」新年初會に於ける會員の集ひ。別項の「淨き友の會だより」を御参照下さい。

軍醫衛生兵の手當の甲斐もなく、同三十八分に護國の神と化したのです。其時「やられた。」と云ふ聲に、「誰だ。」と私が振り向いた時、高臺から轉けて落ちた彼が「大丈夫だ。」と腕を上げたきりでした。

實に彼は、部下思ひの念強く、而も勇敢にして正直で、何事にも眞面目にして至誠を以つて事に當る軍人精神の體得者であつたればこそ、かゝる立派なる最期を遂げ得たのだと確信致します。

かゝる立派な軍人を生みし親方の人格こそ、他人の範たるべきものと思ひます。

今英靈は、其部下分隊が捧持して、最期の〇〇入城を、川端分隊長を先にしてやりたいと云つて、恰も生前の分隊長に仕へる如くにして居ります。何卒御安心下さいませ。

何卒御令息の冥福を御祈り下さいませ。唯之のみ御願致します。陣中一寸したよき機會を得まして、不取敢御報知申上ることが出来ました。

九月二十三日 ほうがしゆらの陣中にて

奥村隊第二小隊長 佐々木少尉

川端トラ殿

彼の母が、此戦死の悲電に接した時は、全く茫然として仕舞つた。總べてのものを取り落したやうだ。顔一面赤くはらして、血の涙に泣きくづれて居つた。血縁でない私さへも、止める事の出来ない悲しさに閉ぢ込められたもの、まして血を分けた親だもの無理はない。

でも彼の母は強い。暫くにして此悲痛を包んで立ち上つた。「私だけが子を失つたのではない。二人も三人までも、失はれた親が、〇〇地方にはあると云ふことだ。」

「あの子が病氣でなくて、此上もない名譽のことだ。あの子が兵隊として、成人するなり御國の役についたのも、實は神佛から御國のために授つたものだらう。彼は私の子でない。御國の預り子だつたのだつたのだらう。」
彼母は、こんな事を云つて吾家に、燈明のほのかに照した佛壇に、吾子の白い位牌と寫眞を拜んで、懇に其菩提を願つた。彼に今、清らかな御佛の國に、靜に歸つて行つたことに安心して、野良に何時ものやうに孜々として働いて居ります。(潤記)



まかせ切る信仰

日常勤行法解説

中村 辨 康

(四) 歎佛偈

(如來を讃歎して敬禮し歸依す)

如來妙色身世間無與等 無比 不思議
是故今敬禮

如來色無盡 智慧亦復然 一切法常

住 是故我歸依 (勝鬘經如來功德章に出づ)

如來の妙色身は世間に與に等しきものなし、無比にして不思議なり、是の故に今敬禮し奉る。

如來の色は盡ることなく、智慧も亦た復た然なり、一切の法常住す。是の故に我歸依し奉る。

意譯

如來様の御身體の端嚴御妙なるは世の中に等しいものもなくまた比べることの出来ないものであり、また私達凡夫の決して考

へ及ばないところのもので御座います。是故に今敬禮し上げ且つ禮拜致しますので御座います。如來様の御色相は無量で御座いますして決して盡ることもありません。御智慧もまたその通り無量無限で、一切の法が其中に包れておいでになります。是故に私は御歸依申し上るので御座います。

講贊

既に如來様を私達の身近くに御招待申し上げたのであるから、先づ以て其微妙端嚴なる御相を瞻仰し、そして其色心兩面の廣大さを感じなければならぬことになった。

佛身の相に就ては一般には「三十二相八十隨形好」と云つて居る。觀經の第八觀などにも説かれてゐるし、色々の經典にも云はれて居るものである。三十二相は四肢に八相身體に十二相顔目鼻齒舌音聲等に九相頭及び額の二相合して三十二であり、八十隨形

好は身體の各部に六十種、頭より上に二十種で何れも佛身の莊嚴の有様を説いたものであるが、觀無量壽經の第九眞身觀に依れば「無量壽佛に入萬四千の相あり、一の相に各八萬四千の隨形好あり」

と云つて居る。今ま十萬を億（洛叉）として計算すると七萬五百六十億種の相好がある譯だから、到底私達凡夫の企て及ばないものである。

だから「無量」と云ふより外には考へられず、その如來の色身の殊妙なること、世間と比ぶべきものなく等しかるべきものなき絶大さを驚歎せざるを得ないのである。

それも畢竟如來様は大智慧であり大慈悲でましますからである。色相には限りがある。然し其色相の内面に藏されて居る「德」は、其色相をいやが上にも光輝あらしめて「無等無比」なる「無量端嚴相」たらしめて居るのである。

謙へつて思ふに何と私達の姿の貧弱なることよ。それも心の反映でしかないのである。思へば誠に恥かしい限りと言はざるを得ない。顔の造作や恰好は元より遺傳されたもので、今更醜いと云つて悔んで見ても追付く話でないから、兩親に不服を申し立てる氣もないが、せめては修養に依り信仰に依て何とか人並に好感を持たれる位の事にはなりたいものである。

辨榮上人は「世尊が六根常に清らに慈顔とこしなへにうるはし

くいませしは、内、靈應に充ち給へばなり」と云はれて居るが、私達もさう信するものであると共に、それはまた一面自分自身の醜さが内面に靈應に満たされて居ない事を證明して居るものとして悲しくもなるのである。口には信仰を説いても心にはまだまだ信仰が充實して居ないのである。否應なしに事實がそれを白狀して居るのである。

然し私達は聖者ではない。何處までも下劣な凡夫である。醜惡な凡夫である。だからこそ如來に歸命し如來に敬禮し如來に南無するのである。

自分の心で救はれる譯ではない。如來の大慈悲に依て救はれて行くのである。況してや姿の好醜などが問題になる譯はない。そんな自力心を起すのは却ていけないのではないか。私達としては唯だ如來様を敬禮し南無して行くだけでよいのではあるまいか。そして如來様の大智慧大慈悲が到る處に現はれて居ることを努めて日常の中に發見しつゝ夫を喜んで行くやうに心掛けて行くべきではあるまいか。

さうだ。それでよいのである。如來様の大智慧大慈悲は此處にも彼處にも現はれて居るのである。

山の姿も川の流れも木も花も鳥も蟲も其儘に如來の大智慧の相であり、陽光も風聲も水音も四時の變化も皆な如來大光明の顯現

ならざるはないのである。諸曲「高砂」の中には

「有情非情の其聲みな歌に洩るゝ事なし、草木土沙風聲水音まで萬物のこもる心あり」

と云つて居るが、信仰の眼には萬物萬事皆な如來の靈應であり靈光である。

即ち如來は「無量相」であり「無盡色」であるからである。

萬物を「萬法」と見る時、凡ては如來の大智慧と拜まれ、萬事を「佛光」と拜む時、一切は如來の大慈悲と喜べる。科學者の眼には萬物が原子電子の理に見え、歌人の耳には非情の草木まで歌の聲に聞えるのである。況して宇宙の根本中樞の大靈に直參せんとするところの信仰人の耳目にそれらが如來の妙音如來の妙色として感ぜられない筈はない。

誠に如來の「相」は「無量相」である。如來現して至らざる所なく、事々物々悉く「如來相」である。此故に「色無盡」と云はれるものである。

また如來の「相」は「無相の相」であるから私達の考へて居るやうな「相」ではない。觀音様でさへ「三十三身」を現じて一切を濟度すると云つて居る。童子を度するには童子身を以てし、婦女子を度するには婦女身を以てし、毘沙門を度するには毘沙門身を以てし、魔王を度するには魔身を以てする等である。即ち智慧の働きの縦横無礙自在なることを表はしたものである。

觀音様の名は觀自在菩薩とも云ふが、阿彌陀様の別名を觀自在王如來と稱して居る。即ち觀音様の王様であり親様であり觀音様よりももつと勝れて居る事を表したものであらう。して見れば觀音様が「普門」でまします以上に阿彌陀佛は「大普門」でましますねばならぬ筈である。三十三身どころか、有りとあらゆるものが阿彌陀様の應化であり權現であるべき筈である。

誠に天地一切のものは悉く阿彌陀の法身ならざるものはないのである。此故に阿彌陀佛の中には一切の法が常住して居る譯でもある。

即ち「法」とは軌範であるが、軌範は正しきものでなくてはならない。だから軌範に従ふことは、物其物、事其事が正しくあらんが爲である。しかも正しきものは永遠に亡びる事はない。永遠に亡びないものは「無量壽」を保全するものである。だから「法」は永遠に生きる根本であり基本である。隨て私達が阿彌陀佛に絶對の歸依をなす理由もそこにハッキリ瞭解出来るのである。

以上は歡佛偈の内容の概略に過ぎないが更にもう一層之を突きつめて云へば、如來の妙色身も、如來の無盡色も、如來の無盡智も、如來の常住法も、それは單に如來自らを莊嚴する爲にあるのではなく、畢竟一切衆生を生かさんが爲の大慈悲の發動に過ぎないものである。

「一一の眷屬皆悉く衆生を度せんが爲」でそれ以外に何もので

もないのだから、其事に思ひ到ると本當に有り難い極みで、誰人か此の大慈恩に感泣しないものがあるであらうか。氣がつかない人は止むを得ないことであるけれども、少くとも一と度氣が付いた限りに於ては誰でも感泣してよいと思ふのである。

一度氣のついた限りに於て茲に心からなる敬禮があり歸依があつてよい筈である。それが即ち「信仰」なのである。

だから此「歎佛偈」を稱へて心から敬禮が出来、歸依が出来たならば、もうそれで信仰に入つて居るのであつて大いに喜んでよいと思ふのである。外に何も望む事はいらない。信仰以外に「無生忍」も「正定聚」も「不退轉位」も何も要らないのである。信仰一つで満ち足りて居てよい筈だからである。それらは如來様の方で適當に心配して居て下さることであらう。こちらとしては餘分なおねだりをしない方が本當である。

既に歸依したのである。歸依とはまかせ切つた心である。即ち「歸」とは「歸る」ことで、嫁に行くことを「歸る」と云ひ「歸ぐ」とも讀む。とつぐとは「取つつく」で委せ切つてしまふことである。また「依」とは「依る」で着物が人に着られて其人の自由委せて居ることである。

之は男の人よりも女の方々がよく諒解出来る心境かも知れない。お嫁に行つて夫に従ひ養父母に盡くし子供に盡くす心は「歸依」の心と同一轍な心境だからである。

「無我奉仕」！

さう云ふ氣持である。

昔の話にこんながある。

或處に豪家があつた。老人夫婦だけで子供がないので度々養子をするけれども、老人達がとても氣むづかしくて誰も居付かない。箸の上げ下しに小言を云はれるので始めは辛棒するつもりでも我慢が出来なくなつて大てい十日か半月位で逃げ出して仕舞ふのである。そんなに口やかましい老人達であつたが、然し身上はあり餘る程あるし、精々五七年も辛棒して居れば自分が主人になれるのだから、大概居違ける覺悟で來るのではあるが、何としても居たゝまれなくなつてやがて離縁になつてしまふのである。

だからもう誰も來手もなくおぞげをふるつて話に乗る人さへもなかつた。ところが或青年が

「自分はかなり辛棒強い人間だから一つあそこの養子になつて見やう」

と思つて居ると、幸ひ話があつたので早速其處へ養子に行つたのであつた。

然し來て見ると成る程ひどひ、何うも朝から晩までガミガミやられるので、

「今日は出やうか。明日は出やうか」
と約一ヶ月程辛棒して見たが、愈々辛棒し切れなくなつて

「今晚逃げ出して仕舞はう」

と決心して居ると、恰度其日に建具屋さんが来て座敷に新しい襖をはめ初めたのである。

養子の青年はそれをボンヤリ眺めて居たが、建具屋さんは頻りに襖の上をけづり下をけづりして建付を直して居るが、チット鴨居や敷居をけづらない。

そこに氣がつくとボンと膝を叩いて

「さうだ。襖は外から来たものである。いくらそれが正確に出て居ても建付の悪い舊來の敷居鴨居の方を直さないで、逆に襖の方をそれに合ふやうにいびつに削つてピッタリ合せて居る。家でさへその通りなのだ。況して人間である。元と元と其家に居付いて居る老人達がいくら邪見でもそれは敷居鴨居である。しかるに私は外から来た襖でしかないのだから、自分の方をアツチをけづりコツチをけづりして老人達の御氣に入るやうに直して行かないのは嘘である」

と悟つたのであつたが、それ以來自分をすつかり「無」にして老人夫婦の氣に入るやうに一生懸命につとめたので、遂に其家を相續して老人夫婦に孝行をなし遂げたと云ふ話がある。

是は一場の教訓談であるけれども、それを其儘私達の信仰上の「歸依」の心持に當てはめても滿更當たらない事もないやうである。

自分には力はないのである。たとへあつてもそれは「我が爲」に用ゐるべきでなく「如來様のお仕事」の萬分の一の爲に使ふべきものである。元來ないものがあつたのは如來様から興へられたものに過ぎないからである。

自分をよくよく反省して見れば何もありません。あゝと思つて居るのは自惚れでしかないのである。だから信じ得たことだけでも不思議である。イヤ實に信じさせて貰いたのである。自分の力で信じたのでは決してない。如來様が信仰へ引き入れて下さつたのである。

如來様の尊さが判つたからこそ敬禮したのである。敬禮したところ其處に歸依があり「信」が成立したのである。

また此偈は元「勝鬘經」の初めの方にあるもので此次に「心の過惡と身の四種（生きること、年寄ること、病氣になること、死すること）とを降伏して已に難伏地（佛果のこと）に到る。是故に法王を禮し奉る。」

一切の爾炎（智の母）の智慧身自在にして一切の法を攝持し給ふを知る。是故に今敬禮し奉る。

過稱量（褒める言葉もないこと）を敬禮し、無量期（譬へやうもない）を敬禮し、無邊法（限らない法）を敬禮し、難思議（考へやうもない）を敬禮し奉る。

哀愍して我を覆護し、法種（法のたね）を増長（ふとらせる）

せしめ、此の世及び後の生も、願はくは佛よ、常に攝受し給へ」

と云ふ四偈が付隨して居るが、最後の二偈は「願ひ」であり前の三偈は繰返し見たやうなものか、成佛の因果を云つて居るものかであるから、結局採用されて居るこの歎佛偈（二偈）が一番いい文句である。意味もまた「讚嘆文」としてハッキリして居るやうである。

然し勝鬘經の最後の「願ひの偈文」が付いて居るのは誠に意味の深いものであり、殊に「此世も後の世も永遠に我を覆護し攝受し給へ」とお願いした勝鬘夫人の心を思ひやると、私達に取つてもまた感慨無量なるものが感ぜられる。

誠に人間の氣持と云ふものは誰でも同じである。敬虔な氣持で如來を讃嘆しそして自分の今世後世の一切を捧げてお委せして居るこの勝鬘夫人の心根が、全く私達信する者の氣持とピッタリ一致して居るのも嬉しい事の一つでなければならぬ。

願くは如來よ。私達をも哀愍し覆護し攝受し給へ。是れ、私達の切なる願ひである。

（字 解）

色身——からだのこと。色は物質のこと。

世間——「世の中」のことなれど佛教にては世に三失ありとし、

一、相對的であつて直に消えて行く、二、眞實のもの

がないから永遠性もなく、三、間違つた考へばかり起すと云ふのである。また世間とは「凡俗」の義、可減の義などの言葉を支那流に翻譯したものであると云ふ。

不思議——考へ及ばないこと。

智慧——私達のやうな凡俗の智は「世間智」であつて佛教で云ふところの「智」ではない。六波羅密などの修行に依て得る。物の眞相をハッキリと知りそして常に覺醒して行く「出世間の智」であつて一智二智三智四智五智六智八智九智十智四十四智七十七智などの分別がある。然しそれは後世だんだん解釋が複雑化して來た繁鎖學のもたらしたものである。

おぼつかない誰れかいひけん小松とは

雲をさゝふるたかまつの枝

露の身はこゝかしこにてきえぬとも

心はおなじはなのうてなぞ

法然上人詠歌

編輯部だより

◇待望の雪が降つて翌日はからりと晴れ上つた小春日和、日本晴とはこんな日のことでせうか。校正室の窓からは屋根々々の残雪が眼にしみるやうです。

◇戦地からのたよりもありました。編輯部の東慈道君は南支で殘敵掃討に元氣で戦つてゐると、はりきつたたよりを寄せました。組織部の辻重光君は中支で敵砲彈の初の洗禮を受けて、意氣いよいよ上ると云つて來ました。一瀬少尉にも面會したとのこと。我々もいよくはりきつて銃後も固めをせねばならぬ。

◇一月號は非常な好評で、追加註文が續々あり、増刷の分も間に合はないと云ふ有様でした。また各地に淨土を中心とした修養座談會等も追々活潑に出來上り、本會

の前途いよく多幸なるを思はせます。國民的信仰確立の益急なる時、本會及び本誌の使命はまことに重大なるを自覺せざるを得ません。

◇本月號の特輯は宗教界の偉人故渡邊海旭師を偲ぶことにしました。時局多事にして思想的にも轉換期に立ちつゝある今日、氏の如き、信行具足の最勝人を偲ぶことは意義あることと信じます。

◇高島米峰先生、大村桂巖先生始め御多忙なお時間をさいて本誌のために御寄稿下さいましたことを深く感謝いたします。

◇本誌のために有意義な原稿を澤山お送り下さいます讀者諸賢に對しては誠に感謝の外ありませんが、何分限りある誌面とて割愛せざる得ないものが多々あります事情御諒察の上、今後とも變らぬ御支援を御願申上ります。(道瀬)

◇本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◇御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様お願い致します。

◇勝手ながら代金引換は一切お断り申上ります。

◇その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で、御願します。

◇本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四年一月三十日印刷納本
昭和四年二月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料五厘)

一ヶ年 金一圓

(送料不要)

！峰高最の書用教布の春

我が信仰

— 内容 —

信	念	懺	本	知
仰	佛	悔	願	恩
郁芳隨圓	武者小路實篤	吉田絃二郎	佐藤春夫	岡本かの子

文壇の巨星が語る信仰の體驗！

四六判二色刷表紙付
定價六錢（送料三錢）
二十部以上一時に購入
の方には一部五錢とす。
法然上人鑽仰會編

この時代の信仰は？ 念佛の眞骨
頂は？ 法然上人は？ 文壇の巨星
が隨筆風に表現された、新鮮な信仰
の言葉は何人の胸にも法悦の燈びを
點ぜずにはおかない！

この内容、この定價！本書こそ布
教用書の最高峰を行くものである！

發行所・法然上人鑽仰會

東京芝公園八二一七八
東京芝公園八二一七八
東京芝公園八二一七八

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十四年一月廿日印刷納本 昭和十四年二月一日發行

淨土 第五卷 第二號

定價金十錢（送料五厘）
滿鮮臺灣金十一錢
外地定價